季刊

直江の津



◉直江津経済文化研究会◉

秋号

2002

9,10,11月

◉特集◉

1 直江津 五智遊覧の旅

2 甲信越のみなと 直江津の再生

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

銀河鉄道駅零時発

知の楽しみ

岩の原ワインの楽しみ

フリースペース

1 すみれが大好きだったダン道子先生

2 相馬御風と中山晋平になる上越の新民謡

ミニ特集

秋は寺町巡り

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえち）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

直江の津

第七号　秋号
二〇〇二―九・十・十一

特　集1　直江津五智遊覧の旅　4
特　集2　直江津の再生　8
巻頭エッセイ　銀河鉄道駅零時発　関　由有子　3
知の楽しみ　岩の原ワインの楽しみ　萩原健一　14
フリースペース
1　すみれが大好きだったダン道子先生
星野達雄　19
2　相馬御風と中山晉平になる上越の新民謡
村山和夫　20
ミニ特集　秋は寺町巡り　12
講　演　「地球」という館　渡邉　隆　24
読書びと　ユルスナールの靴　須賀敦子著　23
見る目　越後の異才　東洋越陳人　28
五智自然の家　22
「民俗藝術」　30
読者から・バックナンバー　31

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



斎京十四春・絵

銀河鉄道駅零時発

関　由有子

しばらくの間、マサカリの形をした下北半島の、その柄の付け根辺りにある村に通っていました。いつもは大宮経由の新幹線で8時間がかりなのですが、乗換が慌しく、スピードに比例して旅の楽しみは薄れていきます。故に、羽越本線経由の夜行列車の時は「旅気分」が高まってしまい、ついつい横道しては、三内丸山遺跡とか旧林野庁青森支所の木造擬洋風建築（今は森林博物館で青森ヒバ輸送の津軽鉄道トロッコ車も展示）に立ち寄ったりしました。しかし、一番の楽しみは、ひたすら長距離のゆっくり列車に乗ることです。ある吹雪の夜には、秋田の海岸線を走りながら、白い波頭が幾つもいくつも列車の淡い光の中に、はじけていました。（この時の青森着は2時間遅れ）

で、その旅は深夜の直江津駅で始まるのですが、零時前後の直江津駅というのは意外に賑わっています。私のような夜行派あり、団体旅行客あり。信越線下り最終列車や貨物列車、そして深夜発着のきたぐに・日本海・能登という、長距離のんびり夜行。北陸線下り列車の（北陸線は京都方面が上りというのも不思議に面白い）先頭車の灯火が遠くにぽっと浮かび、それが段々大きく明るくなって、架線に付けられた小さな燭光がまたたく。寝台車のカーテン越の微かな明るさ。遠ざかる赤いランプ。プラットフォームの沈黙（シジマ）の中を、いくつもの流れ星が行き交います。これって、「銀河鉄道の夜」みたい。それも、増村ヒロシのアニメ映画のシーン。ジョヴァンニとカンパネルラのネコ顔が夜空に浮かびあがって、消えていくまで。観客は少ないけれど、毎夜の定期上映館なのでしょう。

未明の直江津駅にて終結する旅もあります。日本海で4時頃に到着した頃には、新駅舎の工事が行われていて、溶接の火花が夜明け前の薄闇に耀いていました。ここで、1時間ほどぼんやりしてから、長野行きの始発で高田に帰る時には、もう、旅は終わったあとです。

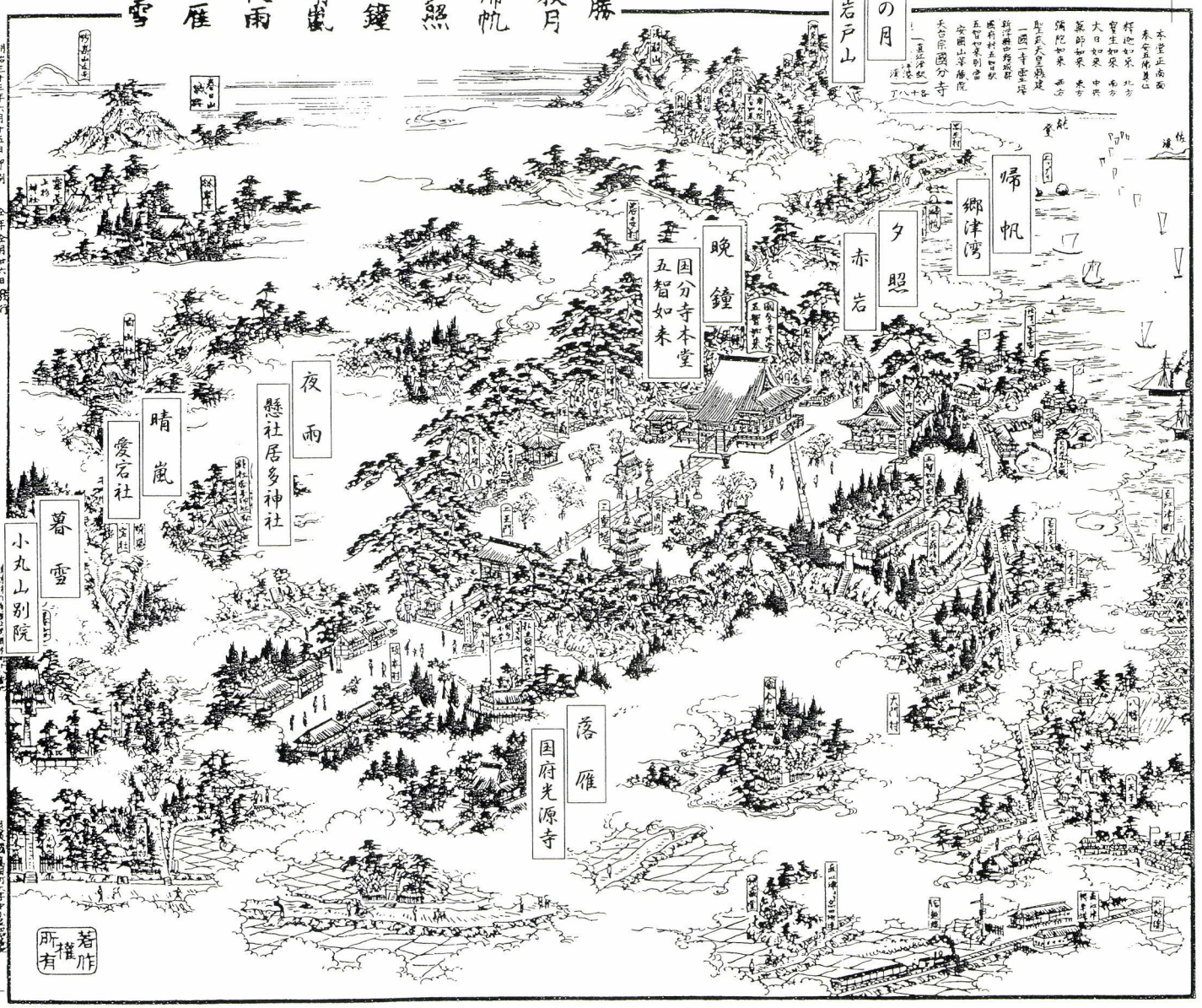
（上越市在住・建築家）

特集

直江津 五智 遊覧の旅



五智八勝
岩殿秋月
郷津帰帆
赤岩夕照
御堂晩鐘
愛宕晴嵐
居多夜雨
國府落雁
丸山暮雪





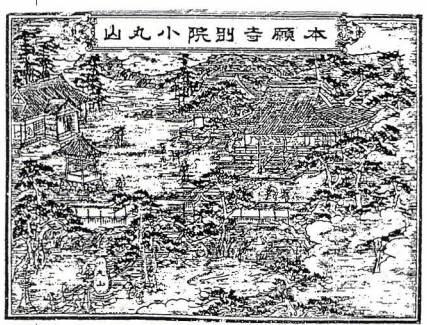
会席料理・宿
山田屋文造



居多神社

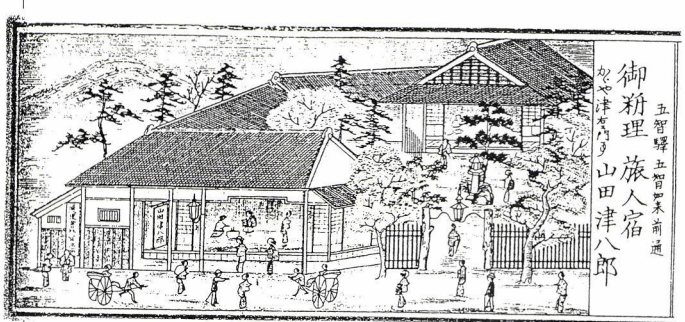


会席料理・宿
清水屋市右エ門



本願寺国府別院



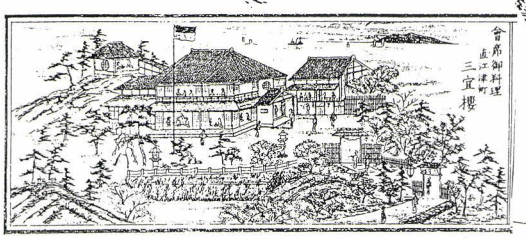


料理屋・宿　かがや津右エ門
山田津八郎

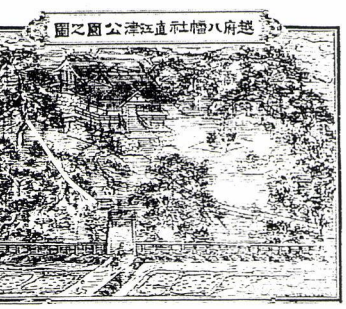


岩泉または岩乃波という酒を醸造販売（字大仏は大場の誤り）

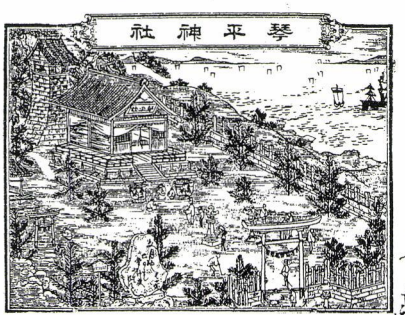
湯殿山
飯綱山
沖見城跡
岩殿山
弘法硯水岩
役行者
奥の院
大日如来
虫生村
能登
佐渡
ニツグリ
居多村
堂浦折
郷津湾
赤岩
藤塚・北塚
清風軒
瀚海楼
国分寺本堂
五智如来
竹ノ内草庵
観音堂
和倉楼
佐田介石墓
百哨碑
芭蕉碑
経蔵
鏡池
日の丸名号
善光寺浜
寄進所
五智如来別当
養爺清水
十念寺
国分村
大門村
直江津
琴平神社
住吉神社
三宜楼
八幡社
八坂神社
直江津より
高田街道
地蔵堂
信越線
古川屋
直江津駅
北越線



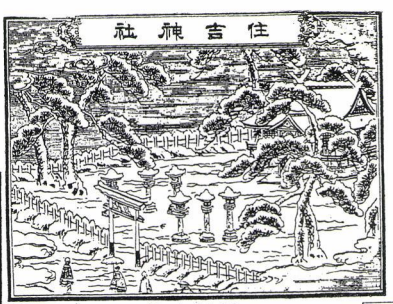
会席料理　三宜楼



八幡社



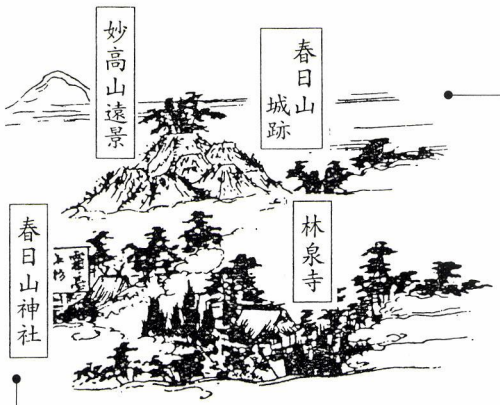
琴平神社



住吉神社



八坂神社



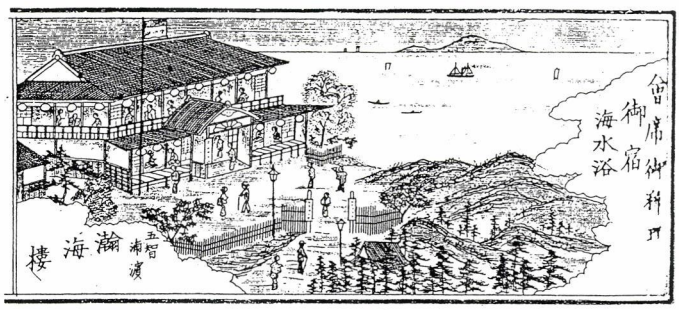


会席料理・宿　和倉楼

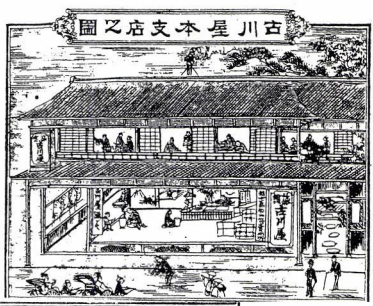


会席料理・宿　黄金湯　清風軒





会席料理・宿　竹ノ内湯　瀚海楼　山文支店



古川屋本店

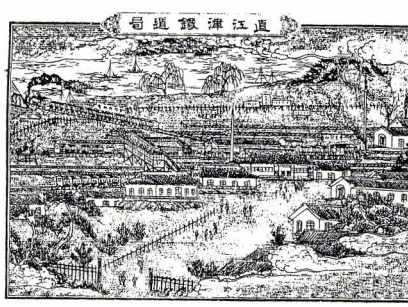


古川屋支店

明治三三年発行の「越後国国分寺　五智境内之圖附近隣名所旧跡」は、国分寺を中心に大掛かりなデフォルメで直江津から妙高、能登まで取り込んでいる。また「五智八勝」として五智周辺の景勝地を選んでいるのも面白い。この地図を基に、全県下を網羅した銅板画による「北越商工便覧」（明治二二年発行）と「直江津繁盛記」（明治三三年発行）の寺社の銅板画によって直江津・五智遊覧の旅をしてみたい。

かつて五智周辺には、和倉楼をはじめとする料理旅館が郷津湾の景勝を見下ろして立ち並び、国分寺門前には、五智参りや親鸞聖人旧跡巡拝、常願池、愛宕池を巡る探勝の人々を迎えた料理屋が並んでいた。秀峰妙高山を望む眺望絶佳の三宜楼は尾崎紅葉を迎え、直江津港の出船入船を一望する加嶋楼……。

直江津駅に汽車が着くたびにあがる旅館の客引きの喚声、先導の持つ旗の下、神社仏閣へ参拝に向かう人の波、駅頭から続く人力車の列、舞い上がる土ぼこり……。このような賑わいは、昭和二〇年の終戦まで確かに続いていたという。

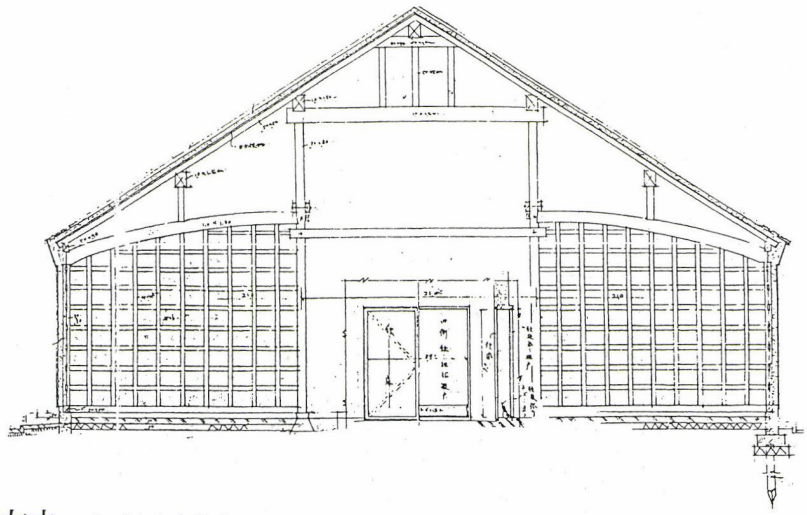


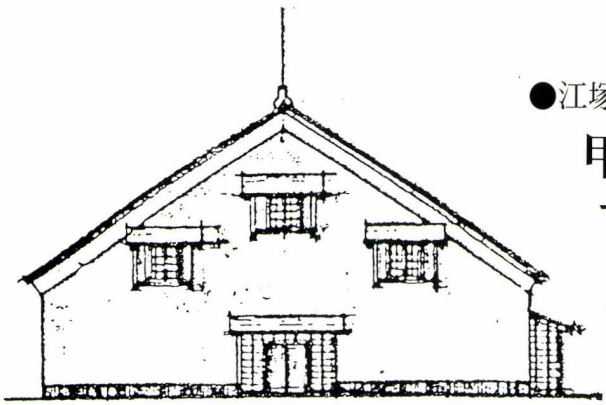
直江津駅

岩片酒造の位置などについて、五智の山口平治さんにご教示いただいた。次号では八幡社奉納の「直江津付近十二景」と春日山神社奉納の東洋越陳人作「五智遠近詩」の旅を予定。

■特集

若き建築家が描くふるさとへの熱き想い

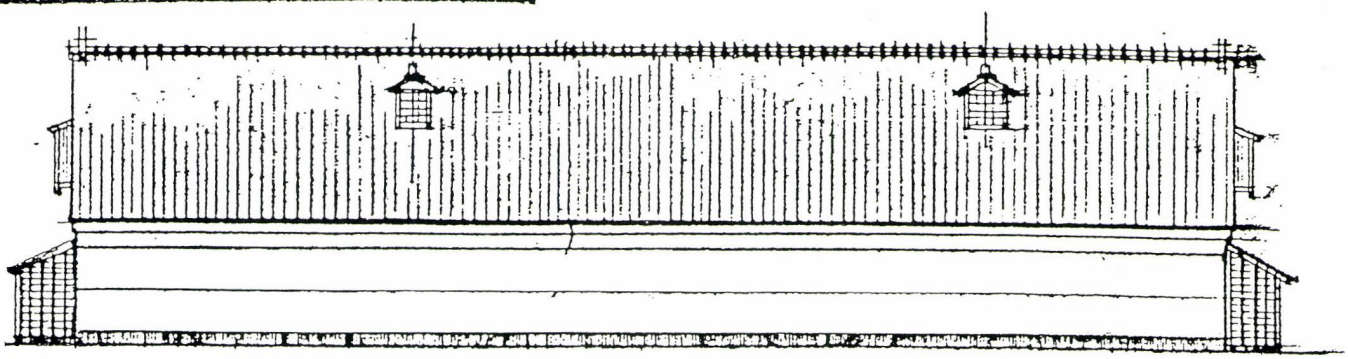




●江塚友之　えづかともゆき

甲信越のみなと……

直江津の再生



本稿は、筆者が平成九年、九州芸術工科大学の卒業設計として大学に提出したものです。

掲載にあたって、筆者による加筆訂正と、紙面の都合上、編集部で割愛、要点のみ掲載したことをご了承いただき、若き建築家の描いたふるさと再生計画をお読みください。

（※建築等の利用については提案であり、所有者の了解を得たものではありません）

■はじめに

戦後の経済発展は、都市に一定の豊かさをもたらしたが、一方で全国同一基準の達成度を競い合った結果、その個性を失っていった。

このような物質的豊かさに代わって、これからの都市に求められるものは、住む、訪れるといった側面における魅力であろう。人々が住む、訪れるという価値をそこに見出し得る根拠は、その場所の固有性であり、それが生み出す他との差異、多様性である。

本計画はこの都市の固有の魅力を回復させようというものである。

■港町直江津の歴史

直江津は、信州という広大な後背地を抱え、古代から海陸交通の重要な地点であった。中世には、背後にある春日山城を拠点とした上杉謙信の商業港として大きく発展したが、近

世に入って、高田築城の際、高田へ町が移され、直江津には漁師や廻船業者のみしか留まることができず、町の規模は縮小した。後に北前船による海運の発達などで、町は再び港を拠り所として立ち直り、廻船業を主産業として新たに発展した。近代には鉄道の敷設と、関川東岸の工業地帯の展開により、港に対する需要が高まり、町は活気に満ちた。

現在、港湾施設は町中から遠く移動して面目を一新し、港を介して北海道・九州・佐渡と結ばれ、さらには日本海対岸諸国との貿易も盛んになり、甲信越地方の日本海側の窓口として、新たな展開を迎えている。

その一方、町中はかつてのような活気を失い、古い写真に見るような駅前の賑わいもなくなった。また近年の郊外型ショッピングセンターの展開もあって、町の衰退は著しいものがある。



三・八市のにぎわい



祇園祭
関川を下って還御の神輿が上陸する

現在の町の魅力

廻船問屋・倉庫　明治期、関川沿岸一帯は荷物の集散に沸く港の倉庫として使われていた。この廻船問屋と倉庫はその往時の遺産である。

三・八の市　越後地方に多く残る六斎市。地域住民や周辺農家の交流の場となっている。町の中で最も活気のある場を形成し、路地も市として使われている。野菜や鮮魚、日用品など生活に密着したものが多い。

祇園祭　高田築城の際、町・神社・寺のほとんどが高田に移されたが、鎮守社である八坂神社は直江津に留まった。以来、祭の際には神輿が陸路、高田に運ばれて高田で祭を行い、川を下って直江津に戻るというものになった。神輿の川下り・陸揚げ・御旅所への安置は、川祇園と言われ、祇園祭の中で最も盛り上がる場面の一つである。また、各町内で出される屋台はこの地方にはほとんど例がないもので、直江津祇園祭の特徴でもある。この屋台はもともと各町内で管理されていたが、現在では、町から離れた屋台会館に収納されている。

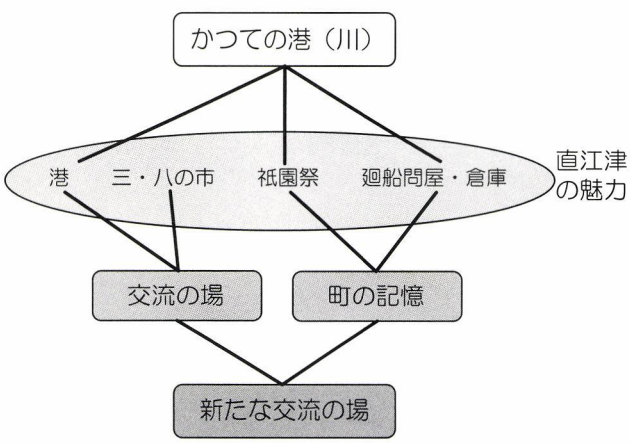
計画主旨

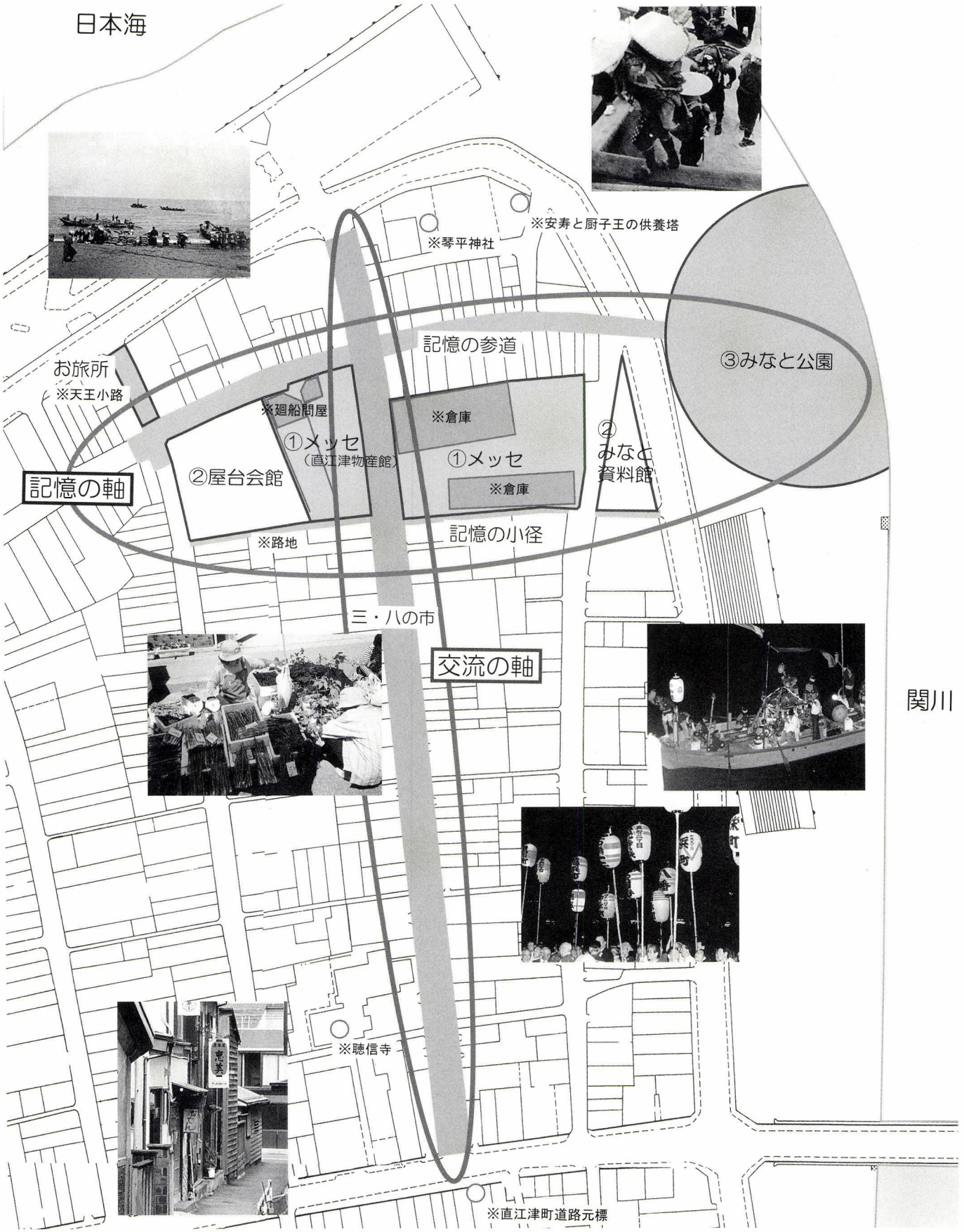
本計画では、**みなと**という記憶を取り戻しつつ、未来に向けて、**みなと**の記憶とともに持続していく町を提案する。

現在、港はその様相を一変しているが、かつて、**港は直江津の日常的な存在**であり、町の随所に**みなと**を物語る空間が残っている。

廻船問屋や倉庫、あるいは川（以前の港）に対して垂直な狭い路地（小路・しょうじ）は、当時、港に従事した人々が往来した空間であり、現在でも直江津に住む人々の生活路として使われている。これらは**港とともに歩んできた直江津**の姿を垣間見ることのできる空間である。

これら直江津の形成を支えてきたみなとを、




日本海
※安寿と厨子王の供養塔
※琴平神社
記憶の参道
③みなと公園
お旅所
※天王小路
※廻船問屋
※倉庫
①メッセ
（直江津物産館）
①メッセ
②
みなと
資料館
②屋台会館
※倉庫
記憶の軸
※路地
記憶の小径
三・八の市
交流の軸
関川
※聴信寺
※直江津町道路元標

その「象徴」として捉え、かつての魅力ある港町直江津の記憶として、みなとを町の中に転化し、まちのアイデンティティとして確立させる。

みなとの記憶　廻船問屋や倉庫の残る空間を港町特有の港(川)に平行な空間構造の断面的な断片と捉えることで、町の記憶を蘇らせる。

みなとは本来、文化交流の場でもあり、直江津もその恩恵を受けて成長してきた。そのみなとを他地域との交流の場として捉え、この計画で再認識していく。

交流　みなとという記憶を受け継ぐ町は文化交流の場となる。三・八の市は現在、町の中で最も活気溢れる場である。そこを人と人、人とモノ、人と文化の交流の軸とする。

直江津の記憶を留めるものとして、もう一つ、祇園祭がある。

祇園祭　祇園祭は、直江津のアイデンティティ存続の証であり、その舞台となる川と天王小路は、直江津の記憶の軸となる。

計画概要

直江津を物語る二つの軸を主軸と捉え、計画の柱とする。

交流の軸　川と平行な三・八の市の通り

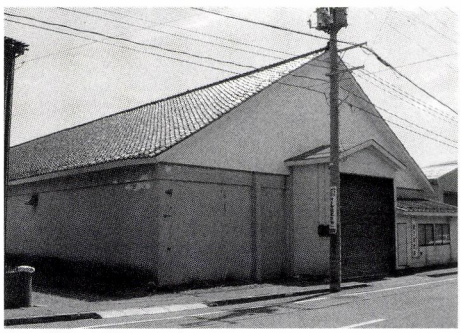
記憶の軸　川に垂直な空間

この軸の周りにさまざまな出会いを展開させる。

①**メッセ(見本市)**　市の通りと関川の間にある倉庫を他地域との交流を生かした市(メッセ・見本市)として再生。三・八市とリンクさせ、交流を広げる。メッセでは、日本海沿岸諸国との交流地として、各地の物産展などを行い、環日本海のみなととしての顔となるための機能を果たす。交流の深い北海道、交流の浅い九州、この双方の更なる交流の進展を促す観光物産センターも設置する。

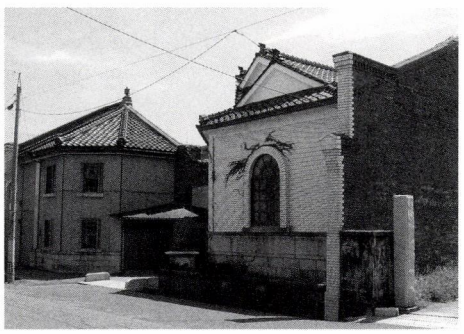
また、明治期に建てられた和洋折衷様式の廻船問屋の建物を直江津物産館として活用する。

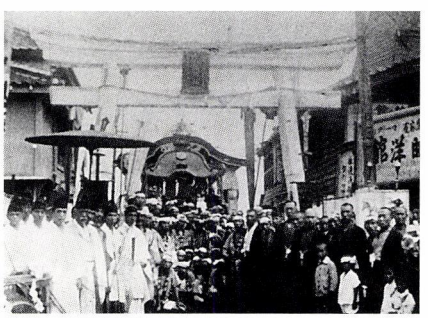
甲信越地方の日本海側の窓口である直江津の核となる場(＝メッセ)を形成し、他地域との交流を生かした町の軸としていく。



大正期に建てられた海産物保管用の土蔵造りの倉庫
タイトルページの図面は昭和40年頃までの意匠を伝えるもの

明治期に建てられた廻船問屋の建物





天王小路

②**屋台会館・みなと資料館**　直江津の活力の象徴である屋台、その展示施設である屋台会館を本来あるべき町の中に移転。みなと資料館では直江津の歴史を紹介する。御旅所も天王小路に戻し、直江津のさまざまな記憶が交錯する場とする。

③**みなと公園**　川岸は神輿の直江津への還御というドラマティックな舞台となる場所であり、また、かつては町に住む人々の生活の一部(洗い場など)でもあり、親水性を有する場所であった。ここを再び、祇園祭やみなとを意識した親水空間とする。

終わりに

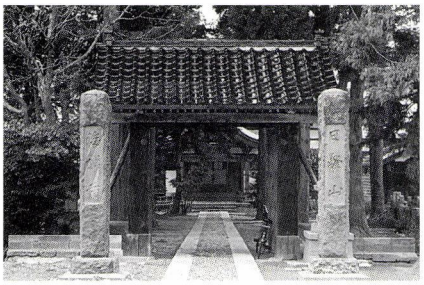
直江津が持つ固有の魅力を回復させることによって、そこに住む魅力が生まれ、新たな経済と文化が育つのではないだろうか。

■プロフィール
昭和四七年　上越市直江津出身
平成九年　九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科卒業／上越市内の設計事務所に勤務
現在　上越TMOなおえつ茶屋

ミニ特集

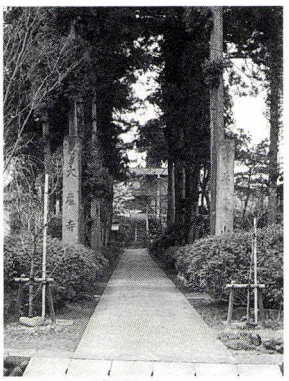
秋は寺町巡り

日峰山　海鱗寺（かいりんじ）　曹洞宗
上杉謙信の帰依を受けた大桃が天正２年に開く。宝暦地震の供養塔や江戸千家荒井宗二の碑がある。





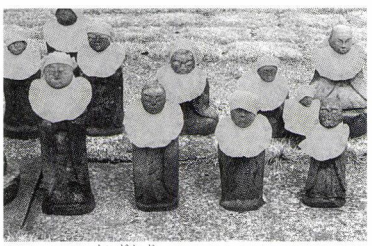
法頂山　妙国寺（みょうこくじ）　日蓮宗
安産、子授けの「よなひめさん」で有名。山岡太夫が「神霊位」として祀られている。



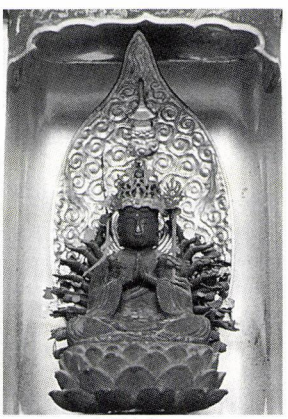
五台山　大嚴寺（だいごんじ）　浄土宗
足利尊氏の菩提所。慶長16年に足利より高田城下に移る。５月には真っ白なツツジが咲き乱れる。



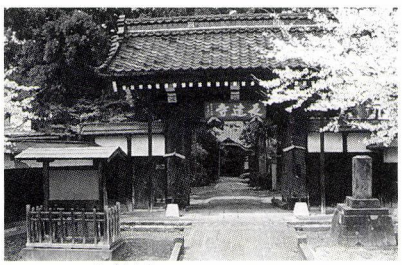
洞獄山　長徳寺（ちょうとくじ）　曹洞宗
「賽の河原」を表した鬼や泣きじゃくる子供、地蔵さんが門前に並ぶ。



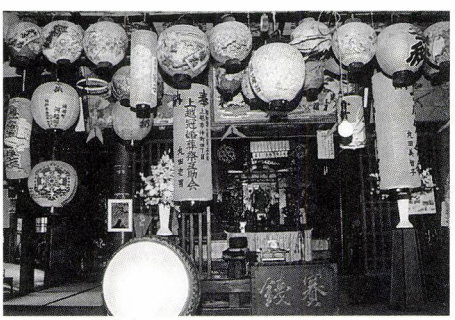
高陽山　太岩寺（たいがんじ）　曹洞宗
周辺にはまだ田んぼが残り、昔の寺町の風情が残る。



一澤山　浄林寺（じょうりんじ）　浄土宗
上杉謙信が栃尾から春日山へ馳せ参じる際に海上の嵐を鎮めて謙信を救ったと伝えられる「浜の観音」を祀る。



法光山　長遠寺（じょうおんじ）　日蓮宗
堂々とした山門とゆったりとした境内。日銀の設計者長野宇平治（高田出身）の墓所。



吉祥山　日朝寺（にっちょう）　日蓮宗
佐渡流罪を許された日蓮に帰依して改宗。毎月25日開帳の「出迎毘沙門天」はその時、子供に姿を変え日蓮を寺に案内したと伝えられる。

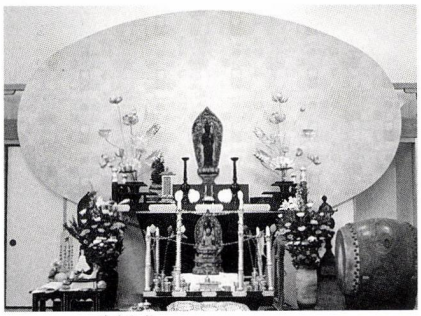


紫雲山　来迎寺（らいごうじ）　浄土宗
承久３年居多神社周辺の地で当麻荼陀羅を掛けて法談をしたのが寺の始まりと伝えられる。

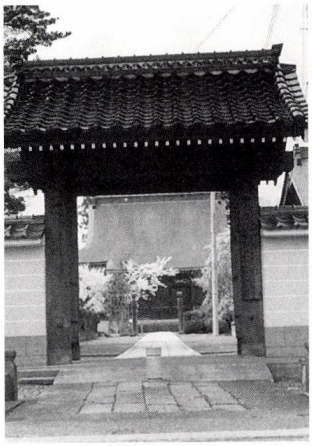


寺町に立つ案内板

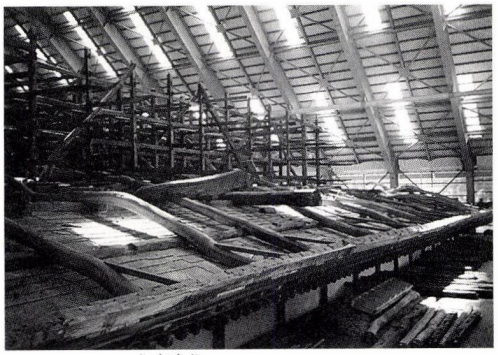
金谷山



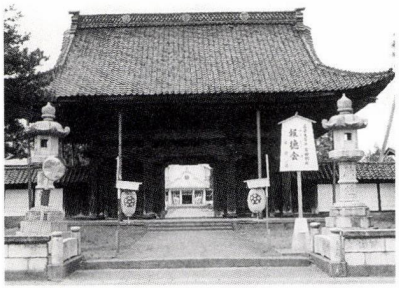
長嶺山　華園寺（けおんじ）　真言宗豊山派
源義経、弁慶一行が平泉めざして落ちて行く時に泊まった寺。直江津の観音寺はそのときの「華園観音堂」だった。



中戸山　常敬寺（じょうきょうじ）　真宗大谷派
親鸞の孫、唯善が開いた寺。「赤門さん」、と親しく呼ばれている。



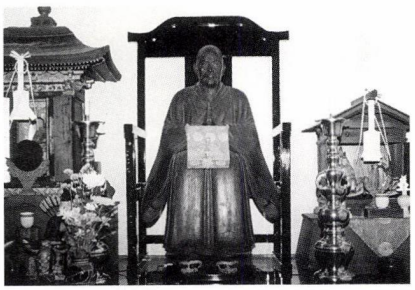
歓喜踊躍山　浄興寺（じょうこうじ）　真宗浄興寺派本山
親鸞聖人が開いた浄土真宗開宗の寺。真宗寺院では県下最大の本堂（国重文）は平成16年をめざして修理中。



東本願寺高田別院　真宗大谷派
モダンなパゴダ風の本堂。文政10年建立の巨大な山門が周囲を圧する。



極楽山　天崇寺（てんそうじ）　浄土宗
山門は市文化財。徳川家光の姉で松平光長の母、高田姫勝子と子で初代高松宮妃となった寧子の廟所がある。



西方山　称念寺（しょうねんじ）　時宗
遊行第6代一鎮によって嘉暦2年五智周辺に建立。一鎮上人倚像は国重文。

高田の寺町は、忠輝の高田築城によって南北約二キロメートルの寺院群として造られました。二五〇年間、時々の藩主の力によって変化してきましたが、現在は表裏二筋の通りに六十六の寺院が立ち並んでいます。

明治維新以降、寺の経済的維持のため境内が宅地化されてきましたが、それでも全国屈指の寺院群として、その景観をとどめています。

寺院のほとんどは、春日山城下や五智周辺、府中から集められたもので、寺歴をたどると春日山城下や越後府中の歴史をうかがい知ることができます。また、藩主の入転封によって随伴したり、置き去りにされた寺などに思いがけない歴史を持ったものもあります。

どの寺も大変よく手入れされていて、観光寺ではない分、静かな雰囲気が漂っています。

参考　「寺院めぐり　高田寺町界隈寺院ガイド」（寺町まちづくり協議会刊）



終南山　善導寺（ぜんどうじ）　浄土宗
文明7年に創建。国府の海岸の小船から善導大師像（市文化財）が出現して善導寺として改める。徳川綱吉の母桂昌院が厚く信仰した。

知の楽しみ

岩の原ワインの楽しみ

萩原 健一　はぎわらけんいち

日本のワインの先駆者

日本のワインづくりは、明治政府によって殖産興業の政策のひとつとして力が入れられ、政府が欧米よりぶどう苗木を導入したりして、その普及が図られてきた。これに呼応して、山梨、北海道、青森、愛知、兵庫や茨城を始め各地でぶどう栽培、ワイン醸造が行われるようになった。こうした時代のうねりの中で、新潟県上越市の岩の原葡萄園の創業者川上善兵衛は、殖産興業の政策や国利民福の思想に共鳴し、そこに大きな希望を寄せ、ぶどう栽培、ワイン醸造に乗り出した。

川上善兵衛は明治元年（一八六八）三月十日、越後国頸城郡北方村（現上越市）の川上家の長男として生まれ、幼名を芳太郎といった。同家は土地の名門で一円の大地主であったが、明治八年（一八七五）四月、父親の善兵衛がなくなると、七才の芳太郎が六代目善兵衛を襲名し家督を継いだ。

善兵衛は男子たるものは殖産興業に身を挺し国利民福を図るべきだと考え、米単作地帯のこの地に、田畑をつぶさず農民の収入を増やす新たな産業として、ぶどう栽培、ワイン醸造に着目し、自宅の庭園を壊し、裏山を開墾し、岩の原葡萄園を拓いた。善兵衛二十三歳であった。

川上家の裏に御旗山という雑木林の小山があり、善兵衛はここをぶどう園と定めて、自家の田を売りこの雑木林を買い入れ、三百人もの村人を雇い開拓の鍬を入れた。

善兵衛は生食用ぶどうよりワイン用ぶどうを重視していた。いきおい欧米から直接苗木を輸入することになり、そのような品種は、当時はどこにも栽培されていなかったので、どのように栽培したら良いか、我国の気候風土に適した品種は何かを知るための観察調査を続けた。気象とぶどうの生育の関係を研究するため、ぶどう園の一隅に気象観測所を設けて、毎日気温や雨量を測っていた。また、ぶどう栽培やワイン醸造に関する参考書を読むため英語などの外国語を習得しなければならなかった。辞書を頼りに外国の書物から知識を習得する、これらは尋常ならざる努力だったにちがいない。

こうした努力により、善兵衛は、ぶどう園を拓き、ワインの醸造や熟成のため、この地の気象条件を巧みに利用した石蔵を建造し、本邦初の密閉醸造、低温発酵の最新技術を導入し、飛躍的な品質向上を成し遂げるなど、ワインづくりとぶどうの品種改良に大きな成果をあげたが、それらの資金は、先祖伝来の田畑を売って得たもので、事業の経営は必ずしも楽ではなかったのだ。

善兵衛が交際のある勝海舟に、ぶどう園開設の計画を話したところ、海舟は「おこもに*なるなよ」と忠告したという。新たな産業による農民救済、輸入ワインの防止、日本酒＝米の節約による国益増進をかかげて始めた事業であったが、白米酒愛飲の風潮が俄かに切り替わるはずもなく、ワインは依然外国産を歓迎する風潮が強く、善兵衛がつくるワインの販売には大きな困難が横たわっていた。

*こじき

川上善兵衛　三つの偉業

創業者川上善兵衛の日本のぶどうやワインの業界で残した足跡は数多くあるが、ここでは特筆すべき三つの業績を紹介する。

第一に、ワインを志した時にまずぶどう園を開設し、ワインづくりはぶどうづくりであるとの認識を示したことである。「良いワイン


葡萄園から頸城平野を望む

は、良いぶどうから」という言葉があるように、ぶどうづくりはワインの命である。ワインは穀類を原料とするビールや清酒と違って、原料の品質により製造工程を調整する余地が少なく、原料ぶどうの品質がワインの品質に影響する度合が他の酒よりはるかに大きいのだ。

第二に、本邦初のワインの密閉醸造、低温発酵を実現した。善兵衛は明治二十六年（一八九三）の最初の醸造に失敗したのを反省し、翌年には本格的石蔵を建造し、これまでの開放醸造に代えて密閉醸造を行うこととし、さらに発酵の時に温度が高くなりすぎるのを抑えるため、氷室の雪を利用した。こうして良質なワインができるようになり、各種の博覧会や共進会に出品して入賞するなど、「菊水印」ブランドの岩の原葡萄園は全国的に名前が知られるようになった。

第三は、ぶどう品種の改良である。外国の書物等から「メンデルの法則」を知った善兵衛は、この理論をぶどうに応用した。既に栽培していたぶどうは五百種以上になっていた。今までの栽培試験の結果をもとに交配を繰返し、一万数百種の中から多数の優れた品種が生まれた。善兵衛は、この成果を一人占めにすることなく世に紹介し、各地でその優れた性質が認められ広く栽培されるようになった。その代表的品種がマスカット・ベーリーAであり、平成十年度のぶどう栽培生産量は一七、三〇〇t、いまでも日本で三番目に多くつくられる品種である。善兵衛はこの交配の仕事をまとめ論文「交配に依る葡萄品種の育成」として発表し、昭和十六年（一九四一）日本農学会より農学賞がおくられた。在野の研究者としては初という快挙であった。善兵衛七十三歳の時であった。

これらのことからも分かるように、善兵衛は農園の経営者というより、ぶどうとワインの研究家であり学者であった。

昭和に入ると、昭和初期の経済不況に加えて大資本によるぶどう酒の大量生産とその広範な販売網に圧迫され、次第に岩の原葡萄園の経営は苦しくなってきた。岩の原葡萄園のような試験的経営では、到底大企業に太刀打ちできなかったのだ。

こうしてさすがの名園も経営困難に陥り、昭和九年（一九三四）、後にお酒博士といわれる東大の坂口謹一郎先生の仲立ちで、寿屋（現サントリー株式会社）の創設者鳥井信治郎と知り合い、川上家との共同出資・共同経営によって株式会社岩の原葡萄園を設立した。

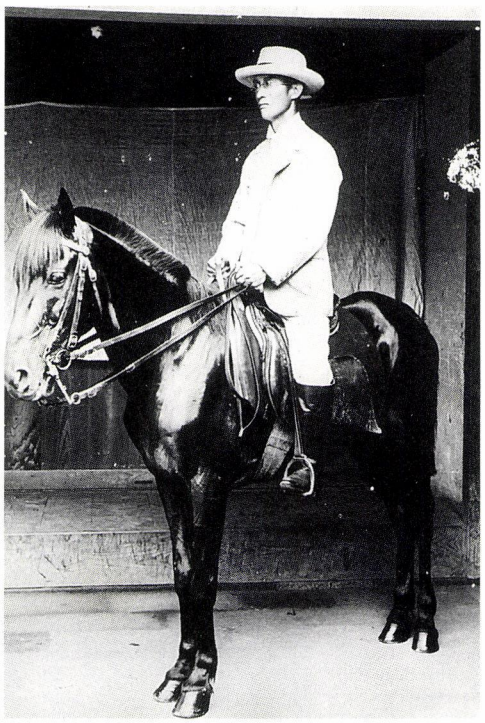
このため善兵衛は、会社経営面での負担は軽くなり、もっぱら品種改良、ワインづくりの研究に励むことができるようになったのだ。昭和十九年（一九四四）五月中旬、避寒地の静岡県興津を発し帰途についた。車中かぜ気味であったが、家に着くと急に悪化し、五月二十一日この世を去った。享年七十六歳。

ぶどうとワインにささげた一生涯であった。

善兵衛いまに生きる

岩の原葡萄園は、今年で百十二年になった。降雨量も積雪量も多く、決してワインづくりに適しているとは言えないこの地で、良くぞ百十二年も続けられたというのが実感である。続けられた理由は「風土を味わいに生かすことで評価される」というワインという商品を扱っていたからこそといえる。さらにはワインの特徴を引き出すための密閉醸造、低温発酵や品種改良などの技術革新を続けてきたからに他ならない。もう一つは、創業者の情熱と、これを受継いだ者たちがこのワインの特徴を生かそうとする飽くことのない挑戦の魂を受け継いできたからこそと考えている。

私たちは今、三種類のワインをつくり続けていると考えている。第一は、ぶどう栽培、ワイン製造の中で培われた製造技術を生かした、毎年安定的に安くて美味しいワインである。「岩の原ワイン」や「フルーティ・ブラン」といった、価格でいうと千円クラスのワインである。第二は、新潟県上越だからこそ



若き日の川上善兵衛

の特徴をもったワイン、これはマスカット・ベーリーAのような品種改良により得た優良品種からつくった「深雪花」といったワインである。第三は、製造場の歴史を背負った付加価値のあるワインで、「ザ・善兵衛」や「ヴィンテージ」といった天候に恵まれた年だけにつくる最高級プレミアムワインである。

我が社のワインは、百十二年間の間まさにこの階段を一つひとつ昇ってきたといえる。創業当時はワインをつくること自体が目的であった。低温発酵を日本で最初に実施し大きな品質向上を成し遂げ、やがてこの土地に合ったぶどう品種を開発し、そのぶどうからワインをつくり、新潟県上越で栽培することにより、果実味豊かな岩の原ワインならではの世界を創り出してきた。

そして、平成二年（一九九〇）、善兵衛の創業の高い志とワインに賭けた熱い情熱を象徴し、創業百年を記念したワインとして、マスカット・ベーリーAを使った本格的プレミアムワイン「ザ・善兵衛'86」を発売した。以後'94、と続いている。

創業者川上善兵衛がつくりだしたぶどうは、岩の原葡萄園だけでなく、今も日本各地でみごとな房をつけている。品種交配によって得たマスカット・ベーリーAはいうに及ばず、善兵衛が苦労して直輸入したナイアガラやキャンベル・アーリーといったぶどうも日本各地に根づいている。今や日本の赤ワインの原料ぶどうとして、マスカット・ベーリーAはなくてはならないぶどうである。特に毎年十一月に発売される国産ヌーボー赤の九〇％以上はマスカット・ベーリーAを原料ぶどうにしている。善兵衛は、今のワインブームの影の演出者といえる。

善兵衛が先駆けた密閉醸造、低温発酵の技術はワインに飛躍的品質向上をもたらし、今ではどこのワイナリーでも必須の技術・設備となっている。

そして今、日本各地で「良いワインは、良いぶどうから」を合言葉にして、再びワイン専用種の栽培が広がっている。善兵衛がワインづくりを目指した時に、ぶどう園の開拓から始めたように。

日本のワイン市場の動き

川上善兵衛が活躍した当時は、酒は食事の前に飲むものといった意識が強く、日本酒に比べて酸味があり料理とのアンサンブルを楽しむ性格の強いワインは、一部の上流階級を除いてはほとんど受け入れらなかった。一方、欧風化の風潮と酸味に馴れない日本人の味覚は、日本独特の甘味ワインを産み出し、昭和の中頃まで甘味ワイン全盛の時代が続いた。甘口のワインからはいって辛口ワインへ移行して行く過程は、日本だけではなく、アメリカ、ニュージーランドなどワイン後進国が歩む共通した傾向である。

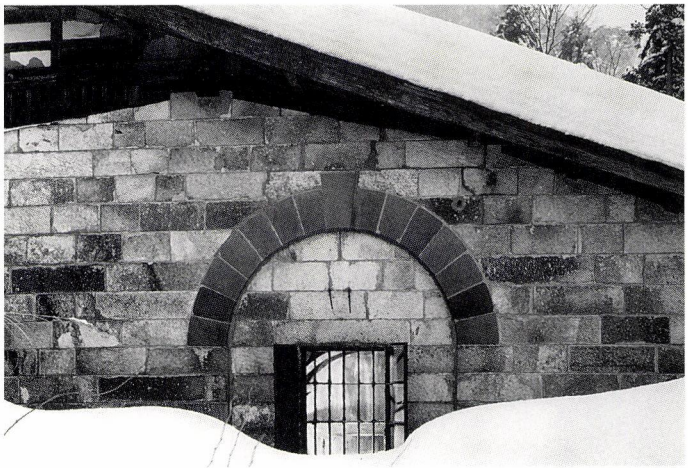
ワイン市場が本格的に拡大し始めたのは、昭和四十五年（一九七〇年）の万国博を契機としてであった。交通、通信機関などの発達で外国を身近なものと考え、生活意識も食生活も全般的に欧風化が急速に進み、ワインの消費も急激に伸び始めた。

七十年代前半の「金曜日はワインを飲む日」といった消費者キャンペーンにみられるようなライフスタイルを訴求した第一次ワインブーム、七十年代後半の千円を中心によく売れた第二次ワインブーム、八十年代前半のより安くて美味しい一升瓶ワインが中心の第三次ワインブーム、八十年代末の世界で一番早飲みできることでブームになったヌーヴォー

と輸入ワイン中心の第四次ワインブーム、バブル景気後の九十年代中頃の三本千円程度の手ごろな価格のワイン、そして九十年代後半の健康をキーワードとした赤ワインブームといくつかのブームを経て、今は国民一人当たりワイン消費量は二Lを超える水準にまで達した。

ワインのいろいろな楽しみ方

ワインの飲み方も、目的によって様々である。それぞれ目的によって、ワインの味わい方も変わってくるのだが、いずれにしてもワインの個性を知るための三つの要素は外観、香、味である。それぞれの要素について、そのワインの種類の標準的なものを頭において評価するのである。



明治31年(1898年)建造の雪室を併設した「第二號石蔵」(市文化財)

まず、外観では何といってもワインの色である。色が濃いのか薄いのかから始まって、白ワインでは黄色を中心に水のように薄いものから緑色の混じった色合いのもの、黄金に近い色合いまである。赤ワインでは、ルビー色から紫黒色の色合いを中心に黒色に近い色合いの濃厚なものからごく薄い赤紫色ものまでの濃淡と、同じ赤ワインでも紫色が強いものからレンガ色、橙色の混じったものまである。これらの色合いからワインの原料となった品種や年齢、産地などが推定することが出来るのだ。

香りでは、まずワインをグラスに注いだ時の香り、ワインをグラスに注いで十分に回してたっぷりと空気を吸わせた時の香り、ワインを飲み込んだ時に鼻から抜ける香りなどそれぞれ特徴ある香りがする。その香りの表現では、できる限り身近な食品や植物、動物の香りに似せて表現するのが一般的だ。例えば、イチゴ、フランボアーズやカシスのジャムやオレンジマーマレード、そしてリンゴ、アンズ、ハチミツ、バニラ、ナッツやトーストさらにはアスパラガスやピーマンなど日常の食品の香りでワインの香りを表現することで、ワインの香りを表現する言葉は豊かになり、誰でもがワインの香りを語れる共通語を口にできるようになる。

味わいでは、口に含んだ時の第一印象とその後そこからじわじわと感じる味わい、口中で空気を含んだ時の味わい、さらには飲み込んだ時の味わい、そしてその味わいの余韻で感じるものなどをいう。甘さは、一般的にはぶどうの持つ甘さを残したものであるが、単に糖分の量だけでなく、酸味とのバランスで感じ方が違ってくる。辛口という表現は「甘味がほとんどない」「甘味が控えめ」という意味で用いられるのであるが、硬くシャープなものから、飲んだ後わずかに甘味を感じるような豊かなコクを伴ったものまでいろいろある。酸味はワインに欠くことのできない味わいで、おもに酒石酸とリンゴ酸が含まれており、多すぎるとギスギスした感じに、少なすぎると切れの悪い印象になる。コクとは、body(ボディ)という言葉でよく表現され「ワインの厚み、ふくらみ」を意味する。ワイン中には水分、アルコール、糖、酸を始め微量なミネラル分が存在し、その量と割合により、ワインは軽いものからボディのあるものの違いを表現している。こうした言葉が素直に口に上るようになれば、しめたもの、ワインの楽しみが倍加することであろう。

岩の原ワインと料理

以上はワインを純粋に官能評価という側面で捕らえた様々な味わい方であるが、ここでは日常生活の中で楽しむケースとして、ワインのある食卓について述べてみたい。

料理とワインの相性を一言で言えば、淡白な味の料理には味のさっぱりしたワイン、濃厚な料理にはそれに負けないワインが釣り合いがとれる。それで一般的には、魚や白身の肉料理には辛口やほのかな甘口の白ワイン、赤身の肉料理には赤ワインが合うといわれて

いる。

刺身や生ガキのような生の魚介類の微妙な甘味を引き立てるには、ごく辛口の白ワインがピッタリ。魚、鶏や豚などの白身の肉をクリームで調理したような料理には、同じ白ワインでもコクのある個性的なものが釣り合いがとれるということになる。

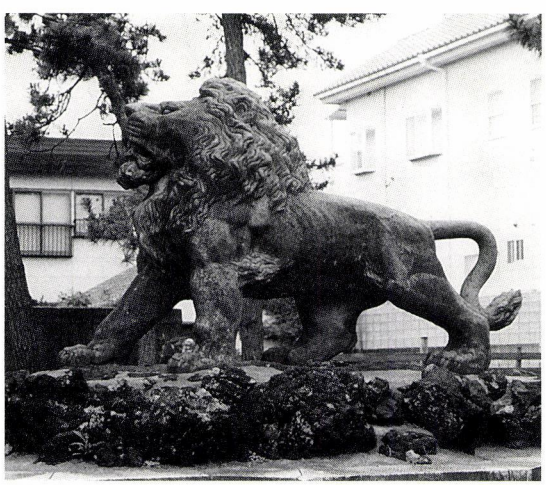
肉料理には赤ワインというのがごく一般的な組合せであるが、味付けの淡いものには軽いワイン、濃い味付けの料理にはワインも負けずに力強い赤ワインということになる。また、味付けの濃い料理でも庶民的なものにはあまり高価なワインは飲まない。正式なディナーのようにコースで料理を食べる時は、前後のバランスが大事になる。さっぱりした料理から濃い味付けの料理に移るのが普通であるから、それに合わせたワインの順序となるわけである。

では、岩の原ワインのタイプは、あるいはどんな料理に相性がよいのであろうか。岩の原ワインの原料ぶどうは、前記したように川上善兵衛の育成したマスカット・ベーリーA中心である。ということは赤ワインが主体であるのだが、マスカット・ベーリーAのワインは、一般的にイチゴのような甘い果物の香り、繊細でなめらかな口当り、果実味豊かな味わいに、穏やかな渋味が特徴である。こうした赤ワインはどちらかというとやや低めの温度にして魚貝類とも合わせることもできるし、白身の肉類に合わせても味わい深い。さらに樽熟したものでは樽からくる香りと複雑味が加わり、最高級プレミアムワイン「ザ・善兵衛」や「ヴィンテージ」では濃厚さとしっかりした渋味と長いアフターテイストが加わる。こうしたワインになるとやはり肉料理がぴったりということになる。

白ワインでは川上品種のローズ・シオターやレッド・ミルレンニウムを使って一般的にやや甘口に仕上げてあるので、料理に合わせるとするとエビやカキといった甘味のある素材がよい。またワインだけで十分に楽しめ、アペリティフとして飲んでもらっても結構である。ただ、千円ワインの白は、上越の魚介に合わせてやや辛口に仕上げている。やさしい口当りと爽やかな酸味が生の魚介類とピッタリの相性である。お試しあれ。

料理に合わせてワインを選ぶ場合に注意すべきことがある。日本では、ワインを飲みなれていない人も少なくないので、ワインについての好みも偏っていることが多い。赤の渋味のきらいな人に「肉には赤ワイン」と言っても満足しないのは当然である。従って、ワインを飲み馴れるまで「料理との相性」よりも「ワインと飲み手の相性」を優先させることだ。そして飲み馴れるにつれて美味しいと感じられるワインの幅も広がり、いわゆる、標準的な組合せに近づいてくる。つまり、気軽な考え方で皆の好みに合わせてワインを選ぶことをお薦めしたい。

■プロフィール
一九四七年　神奈川県逗子市生。
一九七一年東京教育大学卒。サントリー入社／一九七七年カリフォルニア大学デーヴィス校留学／二〇〇〇年三月㈱岩の原葡萄園代表取締役社長



阿吽のライオン（吽形）

柏崎市松波にある諏訪神社の阿吽の狛犬ならぬライオン。国道352線を柏崎市内から鯖石川に架る安政橋を渡って左折。

このライオン、直江津の高達回漕店のライオンと親戚関係にあるらしいのだが、詳しいことはわからない。情報を提供してくれたタウンウォッチャーの話によると柏崎にはあと3体あるそうで、その関係を調査中ということである。

フリースペース 1

すみれが大好きだった ダン道子先生

星野達雄 ほしのたつお

「北海道百年祭の席上、両陛下のおそば近く、遺族としての光栄あるお席をいただき、にぎやかな、そして、はなばなしいフンイキの中で、私はうっとりしながら」亡き父（エドウィン・ダン）のことを思い出していたという、ダン道子先生は、明治三七年（一九〇四）九月一六日、松山敏雄・貞の長女として生まれ、厳しい武家の家で、物を大切にして利用する方法などをしつけられて育った。

幼児から音楽の才能に恵まれ、母貞の兄石川林四郎（著名な英文学者で、東京ＹＭＣＡ英語学校第三代校長をつとめた）夫人からピアノを習った。また、豊島師範付属小学校（現学芸大付属）から女子聖学院に学ぶ間に、立松房子、ペッツオールド夫人、山田耕筰らから声楽、ピアノなどの指導を受けた。

大正中期、日本最初の童謡歌手として妹久子と共に「叱られて」「靴が鳴る」など弘田龍太郎の作品や、小学唱歌などのレコードによって広く知られ、昭和九年（一九三四）六月一七日から始まったＪＯＡＫ東京中央放送局の新番組「歌のおけいこ」を担当してからは、歌のおけいこのダン先生として全国にその名を知られた。

大正一五年（一九二六）七月四日、当時もっとも活躍したピアニストのひとり、ジェームス・ダン（二九歳）と結婚。このときダン先生、二一歳。ジェームスは、エドウィン・ダンと、後妻の中平ヤマ（元旗本中平次三郎の妹）の次男として生まれ、ドイツ留学を終え、帰国してからの挙式である。道子は当時、コロンビア専属の人気声楽家として愛されていた。

昭和二五年（一九五〇）四月、ジェームスと死別するまで、楽壇のおしどり夫婦として活躍したのだった。

この年から昭和四三年まで、武蔵野市吉祥寺本町のすみれ幼稚園長、同名誉園長として幼児教育にも貢献した。また、いくつかの音楽教室を通して多くの門下生を育て、『名曲ものがたり』ほかの著作と『やさしいピアノ曲集』ほかの作曲、編曲も数多く残している。

ダン先生は、日本古来のすみれの花が大好きで、常に紫の着物に黒いレースを軽く肩にかけ、白い草履を召されての容姿は楚々として人目をひいた。

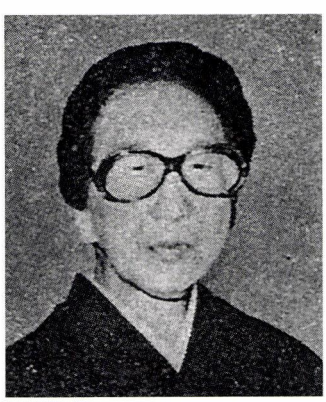
『東京ＹＭＣＡ国際ホテル専門学校六十年史』の著者、元同校校長小林道彦氏は、

「幼児、大奥取締り役の姪にあたる祖母から身だしなみ、ことばづかい等厳しく仕込まれたことが、そのまま身について、どんな時にも紫の和服に身じまいを崩すことがなかった。

校友会の地方支部でも、必ずダン道子の消息を尋ねられ、その厳しい指導を懐かしむ卒業生が多い」と述べている。

愛するＹＭＣＡで五〇年

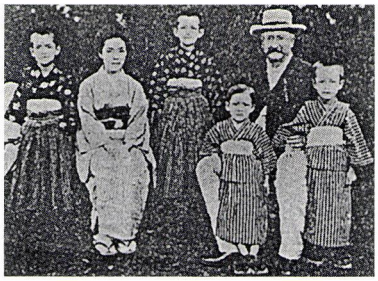
ダン先生は娘時代から東京ＹＭＣＡ総主事菅義一夫妻に可愛がられ、昭和一〇年（一九三五）九月に開校した東京ＹＭＣＡ国際ホテル学校で、ことばづかいとマナーの指導にあたった。「今日は」「さようなら」ではなく、「ごきげんよう」を使うこと、「いらっしゃいませ」ではなく、「いらっしゃいまし」であることなど、注意された人は多い。同一四年（一九三九）四月、東京ＹＭＣＡ芸術園開設には、主幹として夫君とともに音楽教育を担当、戦後は往年の名アナウンサー松内則三を中心に「ことばの教室」を開き、ＮＨＫをはじめ多くのアナウンサーを育てた。同三九年（一九六四）四月、東京ＹＭＣＡタイピスト学校に新設された「秘書実務科」で、同教科を担当、ダン先生の厳しい、しかし愛情のこ



ダン道子先生

もった指導を懐かしむ卒業生も多い。

昭和五五年（一九八〇）正月の日本ＹＭＣＡ百年記念大会で、ダン先生は「青少年奉仕賞」を贈られ、東京ＹＭＣＡ名誉会員にも推挙されている。



エドウィン・ダン一家

ダン先生逝く

昭和六一年（一九八六）一二月、ダン先生は転倒して足の骨を折り、川崎市中原区の中村医院に入院、治療に専念していたが、翌年二月になって体調をくずし、肺炎に心不全を併発して、平成二年（一九九〇）三月七日、八五歳五カ月の生涯を終えた。

葬儀は三月一七日、ＹＭＣＡ会館が改築中のため、日本基督教団弓町本郷教会で執り行われ、多くの校友が参列し、別れを惜しんだ。

（本誌、春号の特集に触発され、また、佐藤氏のご来旨により書きました）

■プロフィール
一九四九年ＹＭＣＡに奉職。名誉主事
妙高高原町池の平第五区
八一歳

フリースペース 2

相馬御風と中山晋平になる 上越の新民謡

村山和夫 むらやまかずお

民謡は民衆の生活の中で伝承されてきた歌であり、文献では俚謡、俗謡、巷謡、風俗歌などと言われる。発生の契機は、生産労働や神事、祭りに結びついている。

上越の民謡で思い浮かぶその一つに「いたこ」がある。古い歌詞に、直江津をうたった「花の今町出る時は、雨も降らぬに袖ぬらす」があり、日本海を行き交う船頭で賑わった往時の港町の様子が偲ばれ、高田は「越後高田にすぎたるものは、犬、寺、道心、時の鐘」と城下町の風情がうたいこまれている。

大正末期から昭和初期にかけて、新しい民謡の創作が高まり、この波に乗って高田日報社がスキー民謡を募集し、大正十五年（一九二六）、「さらさらと」（さらさらと　こころ細かに雪が降る）〈高野盛義作詞、相馬御風補作〉が世に送り出された。続いて昭和五年（一九三〇）には「直江津小唄」（唄の米山　夕日に赤い）、「春日山節」（いくさするなら謙信公のような　アリャ謙信公のような）と上越を歌い上げた新民謡が生まれ、歌い続けられている。これらは、相馬御風作詞、中山晋平作曲になるものである。

この他、御風・晋平両者及び地域ゆかりの者と晋平の作曲になる当地の新民謡として知られるものに次のものがある。

スキー節（雪のお山で・大正一五年）／スキー節（雪よふれふれ・御風補作・昭和三年）／スキー節（チラリサラリと・御風補作・昭和四年）／新井小唄（昭和四年）／新井甚句（昭和四年）／妙高高原温泉小唄（昭和五年）／高田花見小唄（昭和五年）／スキー節（恋ふる思いし・昭和六年）／スキー進めば（昭和六年）／スキー行進曲（昭和七年）／見附小唄（山谷秋瓶、御風補作・昭和七年）／すべる隼（高橋基・御風補作・昭和一〇年）高田スキー音頭（中村八斗・御風補作・昭和一〇年）／糸魚川小唄（昭和一一年）／岩の原小唄（小山直嗣・昭和二四年）／鵜川音頭（小山直嗣・昭和二六年）／深雪甚句（永井白眉・昭和九年）／十日町小唄（永井



「新潟県頸城三郡地誌」
明治 27 年 5 月刊文部省検定済
近藤錦四郎編纂（高城村）室直三郎発行
（高田町）

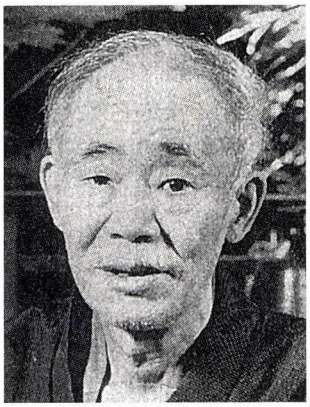
白湄・昭和四年）／松之山甚句（永井白湄・年不祥）

相馬御風は、明治十六年（一八八三）七月十日、糸魚川市大町に生まれ、二十九年、高田中学校に入学、三十四年卒業。在学中に和歌を佐々木信綱に師事し、御風と号して、「高田新聞」の短歌の選者となった。

三十五年、早稲田大学に入学。作家・歌人と交わり、三十八年、歌集「睡蓮」を出版した。その後、翻訳、論集の出版を進め、早稲田大学の講師となった。なお、早稲田大学の校歌「都の西北」は御風の作詞になる。

大正三年（一九一四）、芸術座でトルストイの「復活」が日本で初めて上演された。劇中歌の詞は島村抱月・御風が合作し、作曲は中山晉平であった。松井須磨子が歌う、その「カチューシャの唄」は人々の喝采を浴び、流行歌として全国を風靡し、竹下夢二の絵が楽譜の表紙を飾って人々の話題となった。

大正五年、三四歳の時、すべての地位をすて糸魚川に帰り、大火に遭うなど厳しいものがあったが、生涯の大業である良寛の研究に着手し、多くの良寛研究書を著した。著作は「睡蓮」から昭和二十五年（一九五〇）の「良寛さまの話」、「静なる恍惚」までその出版数は一二六点を数え、二十五年五月八日、六八歳で没した。





上　相馬御風
下　中山晉平

中山晉平は、明治二十年（一八八七）、長野県下高井郡新野村（現、中野市新野）に生まれる。音楽に憧れの心を抱いたのは「十三歳の春、赤十字の地方大会に添ってきたジンタの音楽を聴いた時」のことであったという。音楽への志は堅く、代用教員を経て、島村抱月の弟、佐々山雅一の夫人（北信出身）の縁で上京し、抱月の書生をしながら四十五年、東京音楽学校を卒業した。

民謡の音階とリズムを生かした歌謡曲「カチューシャの唄」（大正三年）、「ゴンドラの唄」（四年）で作曲家としての足場を固め、「さすらいの唄」（六年）、「船頭小唄」（十年）、「東京行進曲」（昭和四年）、「東京音頭」（八年）等々、人々に愛唱される歌を次々と作曲した。

彼は童謡も手掛け、「あの町この町」（大正十三年）、「証城寺の狸囃」（十四年）は、晉平の童謡として広く知られている。ちなみに初期の童謡、春の雨（大正五年）、美しい《お早よう！》（六年）、小学女生の歌（九年）、雪だるま（九年）、春が来る（九年）、花摘み（九年）、雲雀（九年）、青葉のかげ（九年）、来い、来い、蛍（九年）、涼しい風（九年）、露と虫（九年）、あられ（九年）、羽子つきうた（十年）、鴬の夢（十年）、春がいく（十年）、夏の雲（十年）は、御風の作詞である。

昭和二十七年、NHK第二回紅白歌合戦審査委員長に委嘱されたが、十二月三十日、六五歳の生涯を閉じた。畏友、相馬御風没後二年であった。病床につく数日前、黒澤映画「生きる」で、志村喬が演じる主人公が不治の病の癌の宣告を受け、夜の公園でブランコを揺すりながら「ゴンドラの唄」を歌うシーンに見入っていた、と伝えられている。

《付》、相馬御風作詞、中山晉平作曲になる校歌、村歌、社歌等

・名立小（大正七年）・糸魚川小（十二年）・青海小（十三年）・下早川小（十四年）・白根小（十五年）・上杉小（十五年）・新発田農業高校（昭和二年）・大島小（三年）・長岡女子高校（三年）・上早川小・西山小（三年）・上根知小（三年）・鵜川小（四年）・佐渡中（四年）・相川小（五年）・日吉小（五年）・岩船小（五年）・赤泊小（六年）・片貝小（八年）・長岡農業高校（九年）・千手小（九年）・小滝小（十年）・村松中（十六年）・女川小（十六年）・仁科工業株式会社社歌（十九年）・糸魚川中（二十三年）・上路小（二十一年）

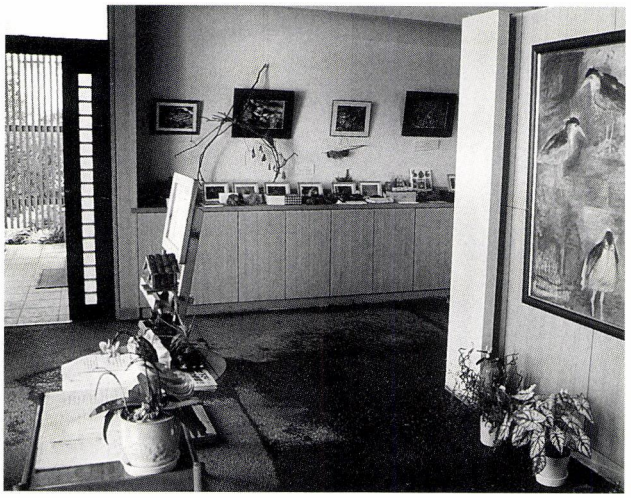
（以下、年月不祥）・一ノ木小・歌外波小・浦佐小・浦瀬小・鏡渕小・柏崎幼稚園・北条中央小・京ケ瀬小・笹岡小・下名立小・関屋小・西越小・山之坊小・与板小・斐太村村歌・与板青年団歌

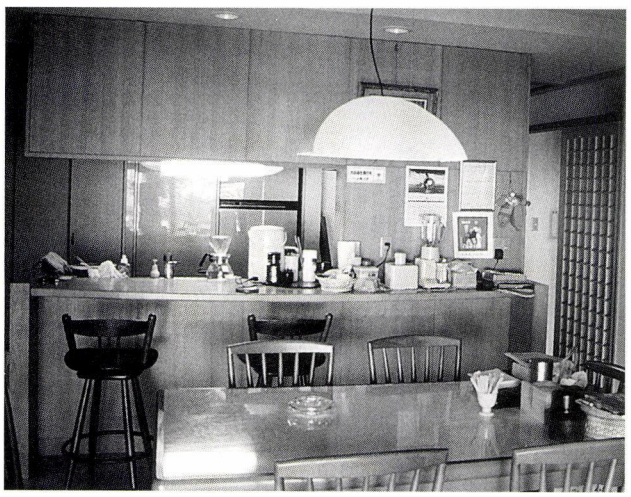
（以下、相馬御風外作詞者）・高田工業高校（小山直嗣）（昭和二十六年）、吉川中（小山直嗣）・（二十六年）・十日町中（永井白湄）（二十七年）

《参考資料》
『中山晉平・生誕百年記念特集―こころの歌と生涯』北信ローカル社（昭和六二年七月）『越佐人物誌・中巻』（相馬御風）野島出版（昭和四七年五月）
「史跡御風記念館志保里」

■プロフィール
地域史研究家
上越市史　現代史部会副部長

五智自然の家





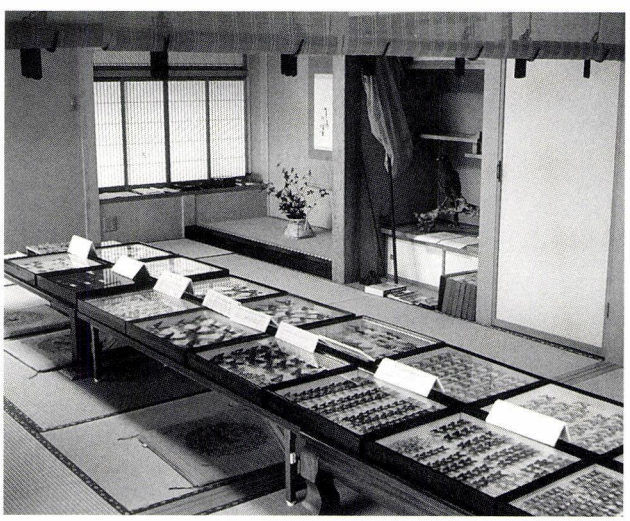
上　野鳥資料館内部
下　厨房とスタンドバー
右　多目的集会室で開催されていた「日本と世界の蝶展」

米山や頸城平野の眺めが美しい、かつて直江津のリゾートであった愛宕山の中腹に建つ「五智自然の家」は〈成熟した大人のためのカルチャーセンター〉と言えよう。

多目的集会室と称される部屋は、二部屋続きで20畳敷の和室と、庭に訪れる野鳥観察のための幅広い縁側が廻っていて、部屋は研修会や宴席に利用できる。また、囲炉裏を囲みながらスライドの上映ができる談話室や茶室、教養娯楽室（碁盤がおいてある）、24時間入浴可能な浴室まである。驚くことに家主は「食品衛生責任者」の資格を持っていて、本格調理ができる厨房とスタンドバーもあり、家主自身も料理の研鑽を積んでいるようだ。

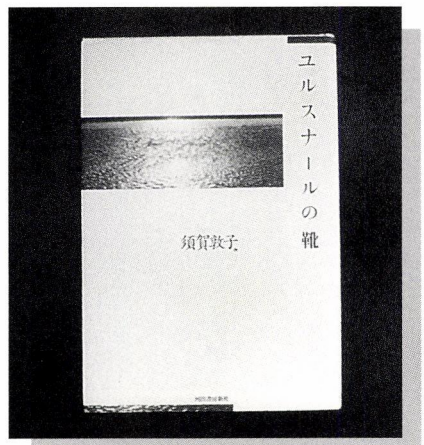
メインは「野鳥資料館ギャラリー」、家主が撮影した野鳥の写真、鳥の羽や巣、バードカービングしたデコイなどを展示、上越の四季折々の野鳥のＶＴＲや関係の図書が閲覧できる。ここは、家主不在でも入館可能。

熱く語るこの家の主、加藤さんは歯科医師というより探鳥会の人として知っている人も多く、「五智自然の家だより」というメールを時どき配信している。



＊野鳥資料館ギャラリー
　入館料　100円　老人・子供無料
　開　館　8：30 AM～7：00 PM
＊五智自然の家利用問合せ
　TEL 025（544）3546

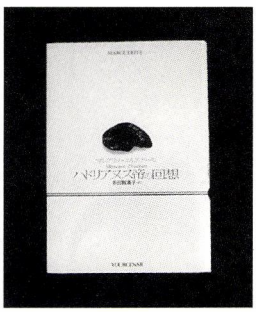
■読書びと



ユルスナールの靴

須賀敦子著

河出書房新社刊
（一六〇〇円）



我が須賀敦子は一九九八年三月癌でこの世を去った。九〇年に『ミラノ 霧の風景』（白水社）で魔法のように出現し、この世が地の光と人生の影に満たされていることの確信を私たちに遺していった女性……。

オリベッティの香り豊かな広報誌SPAZIOに年二回寄せたエッセイ（という名の回想）を纏めた『霧の…』と『トリエステの坂道』（みすず書房）、前号で紹介した炯眼の編輯者、湯川豊の手になる書き下ろし『コルシア書店の仲間たち』と『ヴェネツィアの宿』（いずれも文藝春秋社）、そしてこの『ユルスナールの靴』の五冊が、奇蹟の八年間に刊行された著書の全てである。

須賀敦子は一九二九年兵庫県芦屋に生まれ、小学校から大学まで聖心で学ぶ。パリ・ローマに留学、文学を研究しながら「抵抗運動の経験をもとに革命的共同体を希求する」カトリック左派の動向に関心を寄せる。一九六〇年、イタリアにおける運動の拠点だったコルシア書店の活動に参加するためミラノに移住。翌年には彼の地で結婚、下級鉄道員の息子で第一級の知識人である夫と、貧しい家族、そしてかけがえのない友人たちとの日々を過ごす。彼女が愛し、訳したウンベルト・サバの「生きることほど、人生の疲れを癒してくれるものは、ない」という詩そのもののように。

五年後に夫が逝き、「政治が友情に先行する悪夢の日々」の時代を経験して四十二歳で帰国。

須賀は「蟻の街」で知られるカトリックのボランティア活動〈エマウス〉に精力的に関わり、数年間を廃品回収に明け暮れる。密かに敬愛したシモーヌ・ヴェイユを彷彿とさせる孤独と共棲。

その後の須賀は、ギンズブルグやタブッキなど現代イタリア文学の著名な翻訳者として、また上智大学教授として歩む。生き急ぐ日々の中、弛み無く作品を紡ぎ出し、没後には生前構想していた数々の本が世に届けられた。

須賀の著作中孤高の位置を占める『ユルスナールの靴』は、一九九六年十月上梓された。

アカデミー・フランセーズに女性として初めて迎え入れられたフランス人作家ユルスナールの作品と生涯の軌跡を彫り出す形をとりながら、自身の半生をその時々の〈現在〉の視点から回想し、交錯させ重ね織る。須賀の言葉を借りて言えば、「ひとりの女性が、世の流れにさからって生き、そのことを通して文章を熟成して行く過程」を追い求めることによって「ヨーロッパとヨーロッパ人についての、そして、彼らと私の出あいについての」二重の報告書となっている。

マグリット・ユルスナールは一九〇三年ベルギーに誕生、産褥で母親を失い、父ミシェルの指導のもと個人教授によりギリシア・ラテン語と古典の教養を身につける。強靭な知性と生への情念に支えられながら、後半生をアメリカ最北の孤島マウント・デザート島で（自作の英訳者の）女性を伴侶として暮らす。代表作に、「古代世界の支配者の内面に入り込み一人称の肉声で語らせた想像的自伝」の『ハドリアヌス帝の回想』（白水社）がある。多田智満子の名訳で長く読み継がれてきたこの作品。塩野七生が熱く語るローマの〈賢帝〉とは異質な、時空を超えて融合する主人公と著者の魂に立ち合うことができる。

ユルスナールの作品の原景を訪ねる旅の途中で、皇帝の墓廟に佇む須賀は「ハドリアヌスは、現在の私より若い、六十二歳で他界している。死期の近いのを悟った皇帝の述懐のかたちでこの作品をまとめたユルスナール自身は、八十四歳まで生きた。自分に残された時間はいったいどれほどなのだろうか。」と呟く。

時と競いながら、十三年間のイタリアの記憶を晩年の等しく同じ年月をかけて甦らせた彼女。

題名に暗喩された、勁く歩むためにきっちりと靴を履く、そんな須賀敦子の生涯だった。（審）

●なおえつ信金倶楽部講演会〈抄録〉

「地球」という館

講師・渡邉　隆



わたなべ　たかし
上越教育大学副学長

＊本稿は平成14年8月19日に行われた、なおえつ信金倶楽部総会での講演の抄録である。文責 編集部

ただいまご紹介にあずかりました、渡邉でございます。

私は「ベト」を非常に大切にしております。ベトというのは、岩石が腐って出来たベトベトとしたもので、くっつくという土の一番重要な性質を表している言葉ですが、やたらと手にくっつくんではなく、好きなものをくっつけて離すという事が備わり得る物質なんです。だからベトというのは新素材の最先端のものです。いちばん簡単にベトの効用を申し上げますと、猫のトイレの砂は、いま新しい素材も出ていますが、火山の噴出した物質をそのまま細かい粉にして猫砂にする。そういう機能を持った土を発見して販売している所があります。小さな会社なんですが理学博士が三人もいて猫と暮しているんです。どれぐらいの砂の大きさがウンチが付かないか、きれいに固まって悪臭を出さないか、そういう研究をやっております。これも土がオシッコや臭いを吸収するという、物をくっつけて離さないという性格が出ております。これは土が非常に細かいという性格から出ています。岩石を同じ体積で半分にした場合、同じ重さで表面積が二乗、三乗で変っていきます。従って同じ体積のものを粉体にすると、持っている土の機能が十の何乗倍かになり、非常に豊かな機能物質をさらに大きな機能にします。地球上の岩石からできた細かい土が、そういう意味で実際の我々の生活に役に立っています。

＊

古めかしい題を付けたんですが、「地球」を非常に重要な言葉として皆さんにアピールしたい。学院で地球科学を講義していますが、最近は先生を育てるための講義として「地球と人」というテーマで、さらに「地球と人と時」という形でやっています。

我々が知っている地質の時代は三葉虫のいた古生代、恐竜のいた中生代、人間が出現する新生代、これが約五億年。この前にカンブリア紀とそのちょっと前のプレカンブリアと言われている時代から先は、生物はほとんど見えない世代になっている。一〇年前に、名古屋大学の熊沢峰夫博士が、四五・五億年の中の五億年では地球をとらえきれないと、今の文部科学省に数億の研究費を申請して「全地球史解読」というプロジェクトをやった。この四〇億年の中に素晴らしい歴史がありました。その話を今日はしたいと思います。

地球の館は、どういう準備をして私達人類の出現を待ったか、一五〇億年といわれている宇宙の歴史は地球の三倍あるわけですが、太陽系あるいは地球はどうやって出来たかというと、コズミックダスト、宇宙のチリが集まった大体半径十キロぐらいの塊が、半径数キロぐらいの隕石からできた惑星を取りまきながら、団子状になって原始地球ができたといわれています。

その時に地球はものすごく冷たかったんですが、ジャイアントインパクト、要するに隕石がすごい勢いでぶつかって、そのエネルギーが地球の内部に蓄積されます。これは原子力発電所と同じぐらいのエネルギーで、数千度の温度で地球の中身を溶かして、外側の物質の隙間からどろどろと出てきます。これをマグマオーシャンと言います。このときの

大気はどうかというと、水とほとんど炭酸ガスのすごい熱気に囲まれていました。しかしだんだん濃いガスが出て来ますと地球の万有引力によって留まってきて真っ暗な地球になり、一気に雨を降らせて海洋が出来る。これが四〇億年前です。マグマのオーシャンから海洋のオーシャンになるのに五億年かかったわけです。

この間にCO_2とH_2Oができますので、一番最初の生命体はこの四〇億年前に兆しがあったのではないかと言われています。オーストラリアにノースポール鉱山にある真っ赤なチャートといわれる岩石の中にいた四〇ミクロンぐらいのバクテリアが最古の化石だと言われています。今から三五億年前のものです。

三葉虫が出るまでの三〇億年間にいろいろな準備がされてきましたが、古生代というのは真っ暗で、目がショボッとしていて明るいものが見えないような三葉虫が海にいた時代です。陸に出られる状態でなかった大きな原因は外に酸素が無かった。またオゾン層等々が無く紫外線が強くて生物体が外に出られなかったといわれています。

二七億年くらい前に、ちょうど四五億年の半分よりもちょっと遠いぐらいのところに、強い酸素を出すシアナバクテリアという物質が出てまいります。鉄を喰うバクテリアなんです。その光合成で酸素がだんだん水の中、地中の中に出て来る。そしてついに約六億年前に一気に酸素が増加するとオゾン層もできて、海の中の一部にしか出られなかった三葉虫や何かの脊椎を持った動物が陸に上がってくる。一番最初にえらと肺で呼吸できる両生類が陸に上がった。それが中生代です。その両生類が食べる微生物が出る。そして花や草が出てきた。そういう形で恐竜の世代を迎えるわけです。次に石炭紀という大きな蘆木や灌木の時代が地球の外側の空気を変え、太陽の光を得る。地球の回転が傾いていることによって四季ができ、花が咲いたり実が結んだりして、だんだんと柔らかな地球環境を造ってくる。この二一世紀の我々というのは、四五億年の大きな地球の舞台の中で培われた一つの時間軸の上で恩恵を蒙っているということです。しかも一番重要なのは「地球の歴史は逆行できない」ということなんです。

＊

二一世紀は生物科学としての生命科学の時代であろうと言われています。

一九五三年、弱冠二五歳の生物学者ワトソンは、ＤＮＡの構造は二重螺旋でないといろいろな機能の説明ができないと、生物科学者としてのセンスから考え出したんです。二重螺旋構造というのは結晶学の中では、非常に難しい問題だから我々としては避けたい問題だったんです。その要求をクリックが応えて、結晶構造の計算を成し遂げたんです。現在のコンピュータであれば半分以下の時間で解けたかもしれませんが、あの時代に解くのは大変なセンスが要ったんです。ワトソンの情熱が結晶学を進歩させた。「絶対あるはず」だという信念、これはやっぱり人間の文化の歴史だと思うんです。そして、実現するような物理・科学・生物・地学の知識を実現できるクリックという物理学者が一緒にいたんです。こういうような世界は、次の世代に非常に望まれることだと思います。

そのワトソンから、今どこまで来ているかっていうと、ヒトゲノム、ヒトの全遺伝子マップを書くというところまで来ている。どこがどんな機能を持っているかという遺伝子情報を全部解読できるようになった。そうすると遺伝子に原因があると思われる病気を完全に治すことができる。この医療と遺伝子の問題を支えるのが大型のコンピュータです。ＩＴ技術がこれをサポートする。従って二一世紀の生命科学は世界が動き始める。そういう中でバイオインフォーマティックというような、生命体の情報科学がどんどん進んで、科学の最先端はおそらく生物科学が重要な時代を迎えてくるだろうと思います。

それを支えるコンピュータなんですが、ミクロの状態からマクロの状態まで全部含めて制御できるようになってきています。結晶の一番表面にセシウムだとかナトリウムの原子を三オングストロームぐらいずれた所の穴に持って行きたいということが最近はできるようになった。たとえば肌に優しくくっつくベトのような物質の中に抗菌剤である銀を入れたい、これは靴下の繊維の中に銀を入れた抗菌の靴下になっている。私達が使いたい元素の機能を実際に作り出すマクロの設計までできる段階に来ています。テクニックがここまで来ると、先ほどのワトソンと同じように「どういうアイディアを出せるか」ということになってきます。できないだろうではなく、解かなければいけないという課題の持ち方が、これからの世代の一番重要なセンスになるだろうと思っています。

しかし、この原子レベルの物質操作の中で恐ろしいのは、自然が作らなかった新しい物質が人類を犯すという環境科学の問題や倫理観の問題が出てくるんです。だから、人間がどうやって、どういうものを作ったらいいかという、人間としてなすべきセンスというものが問題になってくる。

実は、四五・五億年の地球の歴史の舞台のなかで、私達が今一番問われているのは、その心の問題なんです。私達の生きている世界、関わっている領域の中で、何を生むことが人類の平和なのかという視点が重要なんだろうと思います。それから「地球の中に人間だけが生きているのではない」ということが非常に重要になってきます。

岩石が砕かれて土になると草が生える。地球の表面が岩石から土壌化されたことで我々は生きていける。ところが土壌化されたところを今度はアスファルト化して、土が空気を吸わないためにヒートアイランドという現象が起って来る。怪我をしたときにバンソウ膏を貼ると、そこが汗ばんでただれてくると同じ状態なんです。その結果、空気を吸うような新素材のアスファルトを作る。利用ではなく、地球と共存していくんだというセンスが、産業界から新たなニーズが出てきて、アイディアが生まれてくるということです。

＊

大脳的な発達段階から言いますと、ホモサピエンスは脳の生物ですから、発達はもうこれ以上望めないという生物学的な限界がある。六〇歳過ぎると先週あるいは一時間ぐらい前に言ったことがどんどん無くなってきている。むしろ受験勉強でやった変な根の公式ばっかり覚えている。これは脳の一番柔軟な部分が無くなっているから、新たな吸着力がもう無いんです。それじゃどうするか、今まで学んできたこの知識や考え方や世界の捉え方をあらゆる領域で、例えば家庭の中で、地域の中で、皆さんの得意分野の領域の中で、次世代を育てる。次世代を育てる能力はホモサピエンスにしかないんです。これが我々の人類の役目なんです。歴史なんていうのが一番重要なんですけれども、絶対やらなきゃいけない。

立花隆は――人間はなぜＩＴの世界に飛び込んだか、それはもう脳みそを増やすことができないことを知って、第三の脳を作った。それがＩＴである。だからコンピュータというのは電脳と言うのに相応しい。従って私達の財産をコンピュータの中に入れ込むことによって、着実にあるものは次世代に伝わる。そういうことを利用して私達の頭の中のものはもっと別に使おう――ということを言っている。

北海道大学に沢口さんという脳科学者が、日立の中央研の人達と、脳が何かをやっている時に外側から数センチ角くらいの領域で働いている部分の微細な電気エネルギーを察知する機械を作った。脳のどの分野がどういう形で我々の行動を規制しているか、どう働いているかということがもっと詳細にわかるのは数年後だと思いますが、そうしますとこの脳科学の問題と倫理の問題が非常に結び付いた形で次の世代を迎える可能性がある。もし逆に使えば原子爆弾よりも恐い問題が出て来る。今、クローンができますから、脳細胞のある部分をコントロールしたコンピュータ化されたようなものを作るグループが出てきたとすれば、これはちょっと太刀打ちできない世の中になるだろうという危険性は出てくる。我々はどうしてもそのリスクに立ち向かっていかなければいけない時代に来ている。

＊

そこで今、ユネスコはどんなことを考えているかと言うと、それまでに平和教育・人権教育・民主主義の教育の三つ掲げてやってきたんですが、昨年から二つの点を加えました。一つは寛容さを学ぶ教育、宗教の理解の問題なんです。寛容さという、要するに違う文化をどうやって理解するかという教育。もう一つは持続可能な可能性に向けた教育、これは地球の全面破壊を避けたいという教育なんです。この教育は実は原爆をうけた日本が一番トップを切ってやっていたわけなんです。アインシュタインの「全面破壊はすべての事柄に優先する」を哲学者のラッセルが支持して、今から三〇年前に宣言している。もし、全面破壊をしたら四五億年の歴史を持ったこの地球が破壊するんだぞと、我々のこの人類はもう二度と来ないと言ってるんです。いまユネスコがそれをいわざるを得ない、この世界の困難さがあります。

＊

最近、楽しい話題が少しあります。人類と同じ文化を持った天体が太陽系の外側に必ずあるはずだという研究をアメリカで四十年前からやっているんですが、こんなことに政府と民間が金を出しているんです。プエルトリコのアルシドにある直径三五〇メートルの電

波望遠鏡で、二八〇万種というチャンネルの電波を一晩じゅう撮る。この中に必ず信号が入っているはずだということで、スーパーコンピュータでその信号を解析しようというわけですが、テープがものすごい量になっているわけです。解析するプログラムは作ってあるけど、あまりにもデーター量が多いんで、スーパーコンピュータでも百万年かかると言われているんです。それで彼等は何を考えたか、世界じゅうのコンピュータを使おうと、家でほとんど寝ている皆さんのコンピュータ、会社のコンピュータも使わせてくれという、世界にむけてETを探そうというプロジェクトを考えた。探すというサーチ、そしてインテリジェンスを入れて、SETI、セティ（セチ）って言うんです。〈SETI@home〉というホームページが開設されて、アクセスするとプログラムを送ってきます。その結果をインターネットでこういうふうに返送してくださいと言っている。これで十年かからずに解けると彼等は言っているんですが、実際に数十万年が一年間で短縮された。今でもどんどん開かれているんです。

アメリカのこのエネルギー、楽しいものを必要なものを解いていくというこのフロンティアの精神。困難に向かって議論する。そこからアイディアを出す。それを世界のいろんなレベルの人まで巻き込んでいくということなんです。これは私達の教育の中で学ばなきゃいけないし、おそらく二一世紀の一番重要なメンタルな構造だと思います。

私はこのことを学生に伝えたいと思っていろいろ話しています。世界市民を巻き込んだ形での文化運動というのは、どんどん出てくるだろうと思います。私はこのセティを代表するような世界レベルでの連帯感、その中で異文化を理解する心、全面破壊を避けるような教育、そういうものを私は上越教育大学の中でやっていきたいと思います。それには皆さんのこの地域の皆さんの支援が是非とも必要になってまいります。私どもの大学は教師だけを育てている大学ではありません。教師を育てるなかで、いろんな皆さんのニーズ、楽しく人生を暮すためのカルチャーを支えるための大学として、生まれ変わっていきたいと思っております。是非ご理解をいただいて、今日の講演を終わりたいと思います。



和久楽のダイニングキッチン

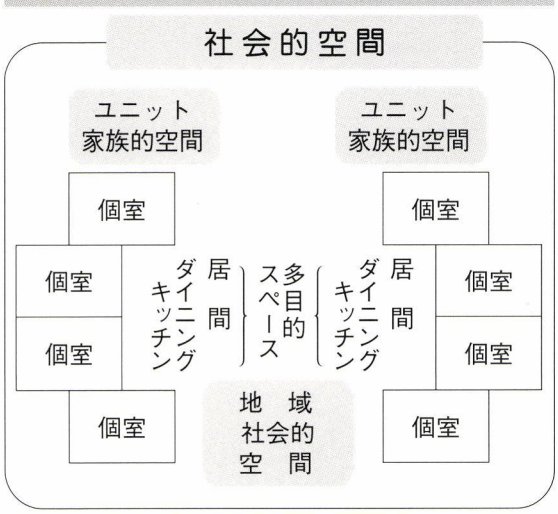
ユニットケア

ユニットとは社会を構成する単位集団を意味し、ユニットケアはスウェーデンで生まれた介護の考え方。従来の大人数の入居者をまとめて介護する介護者側からの発想ではなく８～10人程度の入居者と専属の介護職員で構成する「ユニット」で食事や家族的な団欒の場を持ち、数個のユニットで地域社会的な空間を構成しながら介護するというものである。ユニットの居室はすべて個室のため、従来のような同室者からのストレスが無くなり、プライバシーが守られて精神的安定が得られるとともに、好みの家具を持ち込むことができる。

このユニットケアにより、集団生活への無理な適応の負担とスケジュールから開放され、介護者側は目が届きやすくなり、入居者個々の状態に合わせたきめこまかな介護スケジュールが立てられることで「在宅復帰」を目指すことが可能になる。また地域交流スペースを設けて、施設福祉から地域社会での福祉への位置付けがされている。

社会福祉法人えちご府中会が開設した「和久楽（わくら）」は、この先進的な介護システムを取り入れた介護老人福祉施設として注目される。（編）

ユニットケアのイメージ



目見る（みるめ）

越後の異才　東洋越陳人

高田開府以来、文人墨客の往来が盛んになると高田城下には多くの地元文人がみられるようになりました。江戸時代には倉石米山・乾山親子をはじめ、青木崑論山・森田蘭斎・増田桂堂などの絵師や文人画家を輩出し、明治から昭和にかけては東洋越陳人（とうようえっちんじん）・横尾深林人・石塚仙堂などが南画を中心に活躍しました。江戸時代から明治・大正・昭和へと刻々と変化を遂げる激動の時代にありながら越後の中心地であった頸城地方は、優れた絵師や文人画家が地域に根づいた絵画活動を展開し、当地方の芸術文化の土壌を形成してきたといえます。

そこで、直江津地区に目を向けてみると、石塚仙堂・仙田菱畝兄弟と東洋越陳人が代表的な画人として挙げられます。中でも越陳人は特異な画人として知られています。

東洋越陳人は天保七年（一八三八）、頸城郡野村（現在の三和村野村）の服部三十郎の次男として生まれ、本名は服部郡平といいました。当時、服部家は農家で組頭をつとめており、郡平は裕福な家庭で育ちました。幼少の頃から画は得意で、夏祭りの提灯の画を任されるなど早くも画才を発揮していました。

安政三年（一八五八）、一度は蒲原郡亀田の医師田中家へ養子に入りますが、後に亀田を去り郷里に戻ります。そして、文久三年（一八六三）に医学修業のため長崎へ赴き、学業に励む傍らで南画の大家である鐵翁に画を学びました。

鐵翁（一七九九～一八七一）は長崎春徳寺第十八世住持であり俗姓日高氏、名は祖門、鐵翁と号しました。画を来日した清人江稼圃に学び、極めて枯淡蒼古の画風としていました。木下逸雲、三浦梧門とともに長崎三大家と称され、門人を多数育てています。また、直接入門しなくとも、江戸・京都・大阪の南画人で長崎参りをして春徳寺に鐵翁を訪ねて指導を受けた作家は数えきれない程であるといわれています。当時、長崎は清からの舶来画人との交流により情報発信地として栄え、常に画家たちが注目する土地でもありました。鐵翁も幕末文人画の隆盛に寄与した一人でした。

鐵翁の門人時代、郡平は才能を認められ、師に「越後には珍なる力量」と称されて「越陳人」の雅号を与えられたといわれています。また、別号には「謂公」、「芸山外史」などがあります。

九州・中国地方各地を漫遊後、明治十年（一八七七）に帰郷しました。その後は新潟県内や北陸地方を遊歴し、明治十五年（一八八二）の全国絵画共進会に《苗名瀧密画》など三点を出品して二点は入選、天覧に供しました。これを機に《苗名瀧図》を多く描いており、その際画讃には必ず「天覧」と記しています。明治一九年（一八八六）からは直江津町五智（現在の上越市五智）に居を構えました。貧しくとも制作活動に励み、心豊かな生活を送りましたが、晩年は酒好きに加えて奇行が多く、悪い風評がたつこともしばしばあったようです。

越陳人の画風は山水画を得意とし、水墨画に淡彩を施し、幽玄な世界を表現し





ています。直江津五智や春日山など地元の風景を画題としたものが多いのも特徴的です。構図や筆致も形式にとらわれない自由で豪放磊落な越陳人の性格が表れています。酒によって開放された自身の心情の表現として作品を描いた結果、時には筆が乱れることもありましたが、越陳人の素直な自己表現は見る者を作品に引き込んでしまう魅力があります。

この頃「高田日報」兵事記者として活躍する一方、文人画家としても多くの作品を残した磯野霊山（一八七八～一九三二）は、越陳人の生き方に共感し、「われ生涯越陳人たれば即ち足る」と言わしめるほど心酔していました。越陳人が霊山の画風に与えた影響は大きかったといえます。

帰郷後から大正五年（一九一六）、八一歳で亡くなるまで、越陳人は上越の自然風土をこよなく愛し、作品を通じて表現してきました。名誉欲とは縁遠い存在で、まさに自由人として活動してきたことは、地元に根ざした画人として高く評価されるべきであると思います。

また、越陳人の墓碑は上越市国府の光源寺にあり、越陳人の死後、大正一一年（一九二二）に建立されています。

笹川修一（ささがわしゅういち）
上越市立総合博物館学芸員

右　苗名瀧図（明治二四年）個人蔵
左　五智十二景（明治三九年）個人蔵

越後直江津の祇園祭

田中武男

妙高山の雪を運ぶ荒川も今晩は生きてゐる。漁船に屋形を作り、岐阜提灯を釣り、舳に町名の高張りを掲げた各町内々々の舟は港口と銭取橋との間を往來してゐる。その間に古城橋と荒川橋とがある。多くの觀覧船が幾十艘となく、町船の間を縫うてゐる。テーロ、テーロ、テッテロロー、テッテッテロロー。ドンドチキ〳〵。明笛と太鼓と三味線。どの船も陽氣を競うてゐる。今日は七月十三日夜。煙花は絶え間なく打ち上げられる。足を停めず歩く様にと橋桁の折れるを氣付かふ巡査は提灯打ち振り聲を嗄らしてゐる。直江津町一萬三千と近郊の人々が團扇片手に全部港口に蝟集した様な賑かさだ。町の鎭守様八坂神社（八王子）のおてんの様（御神輿の方言）を例年高田市の祇園に貸與するのが古くからの慣りだつた。その高田の祇園祭は今日限りで明日からの町の祇園に間に合ふべく夕刻五分一街（註・筆者の誤記？）の裏から船で二里を下つて來られるのでこの人達は皆そのお迎へに出てゐるのだ。

十二時、一時。子供連れや遠郊の人達は待ち疲れて歸つたが港口は身動きならぬ黒山の人だ。それが急にざわつき出す。各町村の向ひ船が兩岸に沿うて縦列を作つて上流に進む。囃しは一段と賑かさを増す。愈々御到着だ。水先案内の舟と御送り舟との間に御座船は靜かに下つて所定の位置についた。引き取り町の名譽を誇る片原區の人々は眞ツ裸になつてザブ〳〵河中に入る。三百貫以上といはれるこのおてんのさまではいくら傳馬荷揚げを生活とする人達にも仲々面倒だ。大變な騒ぎの後、掛け聲勇ましく御座所へ御移しして徹宵御守護する。

一夜明くれば十四日。祇園祭の序の日だ。各町自慢の揃ひの浴衣に、花笠を背に、數ケ月の日子と多額の金子とを費して他町に敗けぬ様にと、各自趣向を凝らした踊り屋臺、山車等を曳き出す。車の上に長さ十間位の船形を作り屋形を設け、簾をたれ、正面に俵を五俵乃至七俵積んでその後部には笛、太鼓、鉦、三味線の合奏。紅白の二條の綱を、その町内の少年少女が、これまた揃ひの法被に鉢巻、花笠、ヨーインヤサア〳〵の呼稱面白く又勇ましく練り歩く。向ふからは大きな人形を飾つた山車が來る。その横丁からは藝妓衆が屋臺の上で手振り鮮かに踊り乍らやつて來る。五里四方の人達は町の親類、遠類、知己を頼つて見に來る。その馳走に追はれる主婦も臺所から皿を片手に飛び出す賑かさ。

一方今曉御遷御になつたおてんのさまが町内送りに送られる。各戸から一人二人の若者が出て徒足袋で擔ぐ。荒神様の須佐之男命を本尊とするこの御神輿は出來る丈け亂暴な取扱をして、暴れ廻らないと御機嫌が悪いとの古老の言ひ傳へで、現に三四年前高田市で牛に曳かせたところ、何か奇異な事件が起きて、翌年からはまた肩擔ぎになつた。拍子木が鳴ると降して肩を休め息を入れる。矛の附いた錦旗が幾旒となくなびき、大傘を捧持する氏子と笛や太鼓の神主を從へ、たよさん（神主の方言）が大祓をする。一町内を三四回往復して喊聲を擧げて次の町の人々に引き渡す。全町を二日間で終り暫くぶりで八王子の御座所に納められる。老松に圍まれたその神域の餘地といふ餘地は輕業、見世物、屋臺店等で埋められてゐる。大神樂が舞殿一杯に祝うてゐる。

母や姉の御馳走を滿喫した少年達は提灯ともして又山車の綱を握る。大分上機嫌の若者連は舌なめづりし乍ら一層腕によりをかけて吹く、打つ、ひく。町角で出會ふと双方譲らず懸合が始まる。それも十一時頃になると言はず語らず引き上げて、疲れを忘れて皆遊郭に聚る。遊女屋に取り圍まれた廣い廣場が遊園地になつてゐて、櫓には太鼓が既に鳴つてゐる。櫓下に笛や鉦の若者が囃子を引受ける。それを中心に圓陣が次第に大きくなり、二重に三重になる。粋な浴衣に頬かむり。團扇を襟に或は腰にした飛入り。老も若きも幼きも、芸妓も娘も。

〽踊り來たのか立見に來たか
　此處は立見の場所でない。
〽舟は流れる追分ゆれる
　出入千艘の　名古の浦。
〽歸る漁船夕陽に映えて
　大漁らしいぞ　艫のひゞぎ。
〽ハ、スットコドッコイ、ドッコイショは
　どこからはやる
　高田直江津からはやる。

磯なれ松の村に月も白くなる。踊りは益々高潮になつて行く。砂塵が煙る。祇園祭は十六日で終わるが踊りは雨の日以外九月末日頃迄、否十月初旬まで毎夜立つ。唄と踊りに生まれて來た人達の様に。

読者から

行発月八年五和昭　號八第　巻参第



「民俗藝術」は、若き民俗学者が世話人となって柳田國男・折口信夫の賛同を得て昭和二年に発足した民俗藝術の會によって、昭和三年から七年にかけて発行された月刊の全国誌（地平社書房）。

筆者の田中武男氏は土地（直江津）の人と思われる。ご存知の方は、ぜひお知らせください。

日々見ている米山の民俗は、思いがけない世界だった。編集子の「米山美観論争？」は言ってはいけないことだと、ずっと思っていた。柏崎の人すみません。いつか、妙高や山寺や頸城の民俗について特集を乞う。（大潟町）

投稿募集・内容の問合せ

投稿をお待ちしています。企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが掲載について、多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先　〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五（五四三）九七一五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

第二巻四号（冬号）
十二月二十日　発行予定

年間定期購読（四冊一八四〇円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

編集室から

「東西海陸」は誌面の都合で休載。渡邉先生のご講演は世界が抱える問題を科学者の目からご提示いただいた。

訂正　第六号
11頁　Russell CRAFT
TEL・FAX　025(543)4808

季刊「直江の津」秋号
第二巻三号　通巻七号
発行日／平成十四年九月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市東町一－三
直振興業内
☎〇二五(五四五)〇一〇二
発行者／なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津
—中世都市・越後府中・直江の津—　小島幸雄
ミニ特集　春を呼ぶ祭り三昧
知の楽しみ　水族館に何を見るか　中村幸弘
フリースペース　石瘦庵主茶人宗次という人　平丸誠
見る目　神饌箱

2001年6月　2号　夏号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ
—直江津の産業史—　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」
—囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子
ミニ特集　村上の底力　町家の人形さま巡り
知の楽しみ　妙高山　現在・過去・未来　早津賢司
フリースペース　茶室見学ノート　石瘦庵　佐藤昭夫
講演　生活に潤いを　地元の文化を大切に　小林新治
見る目　シンボ凧
わたしの直江津　世界の果て　杉みき子

2001年6月　3号　秋号（残部僅少）
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫
ミニ特集　50年で変わった港
知の楽しみ　「緑の島」の物語るもの　大悟法滋
フリースペース　こんなまちがあった1　八木登美男
講演　「都市景観」から地域と歴史を考える　浅倉有子
見る目　織部柳図徳利
わたしの直江津　分岐点　吉越泰雄

2001年12月　4号　冬号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔
ミニ特集　直江津路上観察
知の楽しみ　世界一の山脈 関田山脈　南木均
フリースペース　こんなまちがあった2　八木登美男
見る目　どぶね
わたしの直江津　安寿恋しや　馬場和明

2002年3月　5号　春号
特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン
ミニ特集　同じまちなのに知らない“もの”ばかり？
知の楽しみ　能生白山神社　春の大祭と舞楽　土田孝雄
フリースペース　「とんちん館」感傷旅行　濱田研吾
読書びと　『寺暮らし』『その日暮らし』　森まゆみ著
見る目　木造大日如来坐像
わたしの直江津　「ゴチ……？」　米山康久

2002年6月　6号　夏号
特集　1　米山をめぐる民俗文化　渡邉三四一
2　報道のなかの祇園祭
ミニ特集　春日山で遊ぼう
知の楽しみ　雪国の固有と呼ばれる植物　長谷川康雄
フリースペース　山を楽しもう　永島賢司
講演　信頼回復なくして景気回復なし　割田満
読書びと　『イワナの夏』湯川豊著
見る目　小林古径邸の美しさ
わたしの直江津　2002年☆直江津の旅？　魚家明子

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋（バックナンバー取り扱い）／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館／ラ・ソネ菓寮

季刊

直江の津

発行／平成十四年九月二十日■発行者／なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一六〇円)